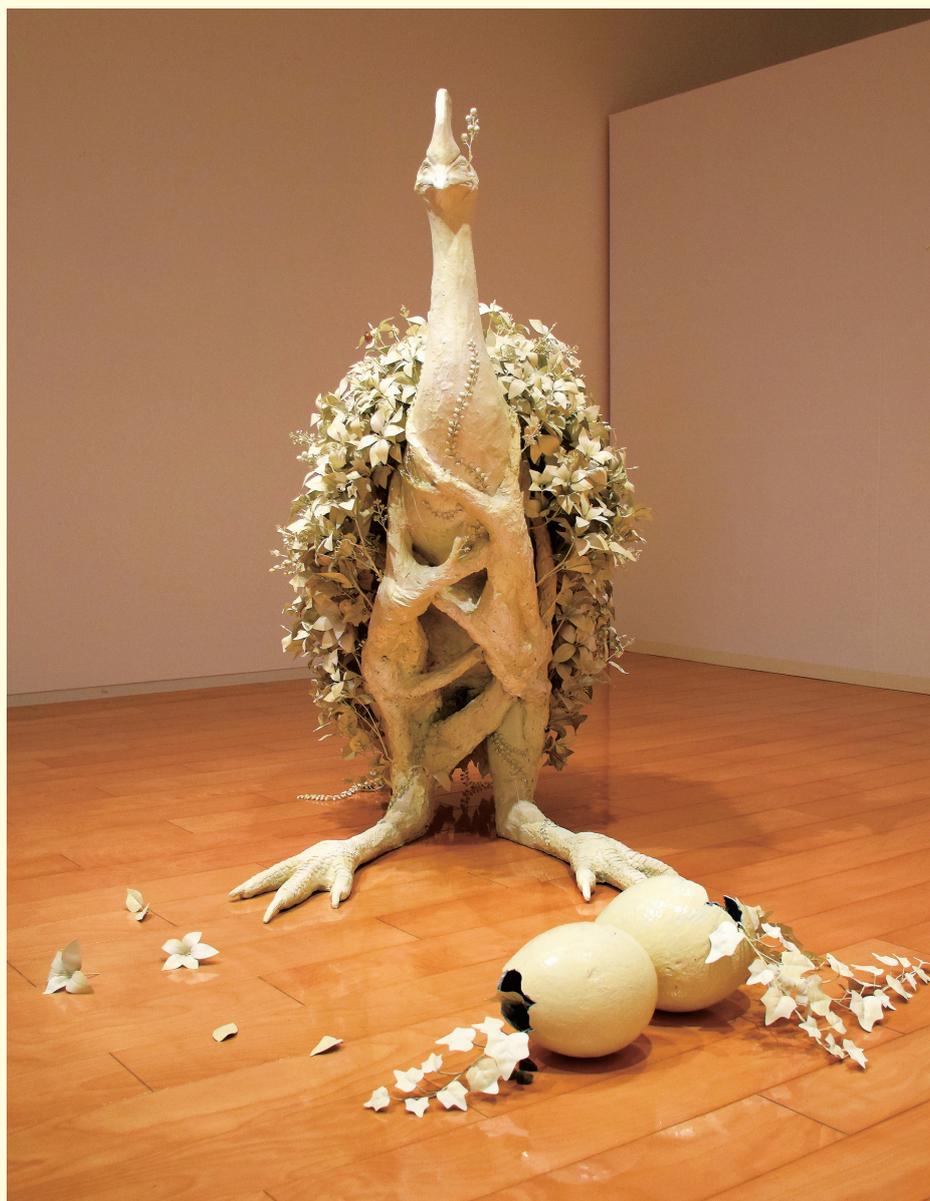


愛媛大学教育学部

第 121 号

# 同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番  
愛媛大学教育学部総務係室内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-8304

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp

# 賀 春 元 旦

愛媛大学教育学部同窓会役員一同



## ご 挨拶



愛媛大学  
教育学部長  
三浦 和尚

### 教育学部が変わります

同窓会会員の皆様には、いつも多方面からご支援いただき、心より感謝申し上げます。「地域とともに輝く大学」を標榜する愛媛大学にとって、地域とのつながりは何よりも大切な財産です。その意味で、わが教育学部は、もちろん愛媛だけではありませんが、とりわけ愛媛の教育に深くかかわり、地域と一体的に存在するという意味で、愛媛大学における存在感も維持できると思っています。

さて、前例のないテレビコマーシャルや、各種の報道でご存知かとは思いますが、「愛媛大学は変わります」。

平成二十八年度から、新学部「社会共創学部」が新設され、産業マネジメント、産業イノベーション、環境デザイン、地域資源マネジメントの四学科で構成されます。「法文学部」は一学科に統合、「農学部」は一学科から三学科に分離です。結果として、西日本でも有数の学部規模を誇る大学となります。

「教育学部」は、教員養成に特化し、いわゆるゼロ免課程が募集停止となります。

新しい教育学部は、「学校教育教員養成課程」を初等教育コース（幼・小 百名）と中等教育コース（中・高 四十名）で構成し、幼稚園から高等学校までの教員の養成を行います。以前にあった「中学校教員養成課程」の復活とも言える改組です。

また、特別支援教育教員養成課程は、二十名の定員で継続されます。

さらに、教育学研究科（大学院）には、教育実践高度化専攻、いわゆる教職大学院（リーダーシップ開発コース五名、教育実践開発

コース十名）が設置されます。従来の学校教育専修は教職大学院に組み込まれ、教科教育専攻は定員を三十名から二十名に変更します。特別支援教育専攻（十一名）と学校臨床心理専攻（九名）には、変更はありません。

なお、ゼロ免課程の募集停止に伴い、スポーツ健康科学課程はなくなりませんが、新たに社会共創学部「スポーツ健康マネジメントコース」（二十名）が設置されますので、「スポーツ健康」の灯は、新学部を受け継がれるものと考えています。教員も保健体育科講座から四名が新学部へ異動します。これらの情報は、学部のホームページでもご報告しております。

こういった改革・改組は、教育学部について言えば、少子化に伴う学齢期の子どもの減少、教員需要の減（愛媛においては今後しばらく教員需要は大きくなる）と推定されますが、さらには、教員養成における教育実践力の育成の要請等に対応しようとするものです。

そういう意味では、新しい教育学部が、量的に地域のニーズに対応しているとは言いきいかもありませんが、国が「文系学部および教員養成学部は、廃止または社会的に必要とされる分野への転換」を示す時代ですから、学部全体として教員養成を百六十名としたことは、将来を見通せば仕方ない数字なのかもしれません。今後は、教員養成の質をどのように保証していくのか、卒業させた学生

がどれくらい現実に教員になるかが問われていると言えます。しかし言うまでもなく、即戦力の育成は要請されてはいますが、即戦力の養成を急ぐあまり、小手先の技術に目を奪われ、五年、十年、二十年のスパンで成長していく教員の本質的な資質を育てることを怠るわけにもいかないと思います。即戦力の育成と、長期にわたる教師としての成長の基盤を作ることは、なかなか両立もしくいくところでは。

この課題を前にして、私たち教育学部は、教員の養成から、教員の研修まで、生涯にわたる教師の成長物語を支援する学部でありたいと願っています。

一昨年から「新任教員コンサルテーション」「教材研究プロフェッショナル講座」という二つの事業を始めました。前者は、新規採用の県内卒業生について、訪問などによるフォローを行うというものです。後者は、教科の内容（例えば「日本史」「代数学」など）について、教材としての理解を深めようというものです。これらは、「生涯にわたる教師の成長物語の支援」の具現化のひとつであると捉えています。

堅い話になりましたが、教育学部の現状をお伝えいたしました。地域の教育学部が教育委員会や現場と協働的に教育に向き合っていくことが求められています。同窓会の皆様のお力添えを心よりお願いする次第です。

## 目次

表紙	山下 智子
「羽ばたく樹」	菊川 國夫
題字 元愛大教育学部教授	三浦 和尚
「ご挨拶」	三浦 和尚
愛媛大学教育学部長	三浦 和尚
心 響	満田 泰三
「やれば出来る」	満田 泰三
学部の今	三浦 和尚
松山市立清水小の「朝の読み聞かせ」	早馬 美香
活動に参加して	早馬 美香
松山市子ども健全育成事業「土曜塾」に参加して	白木 俊宏
「魅力的な生き方講座」	矢野 浩美
学部最近のニュース	矢野 浩美
学生プロジェクト研究「藍染め伝統文化の次代への継承」事業を附属小学校で実施しました	矢野 浩美
教育学部で音楽を学ぶ学生たちが四国がんセンターでアウトリーチ活動を行いました	矢野 浩美
教育学部留学生歓迎会を開催しました	矢野 浩美
職場だより	熊本 英貴
「全力で頑張る」	熊本 英貴
新居浜市・金子小教諭	熊本 英貴
「出会い」	藤山 千鶴
伊予市・郡中小教諭	藤山 千鶴
「出会いに感謝して」	石井由未香
伊方町・水ヶ浦小教諭	石井由未香
「目指せ！ヴィヴィッドな人！」	片岡真由美
宇和島市・遊子小教諭	片岡真由美
「〇〇の先生」	山本 浩之
今治市・北郷中教諭	山本 浩之

# やれば出来る

満田 泰三  
(昭二五青師卒)

定年で引退してからもう三十年近くになった。戦後七十年という歴史の中で、いろいろな体験をしながら馬齢を重ねて数え年の九十となった。兵役に召され、空襲に遭い、丸腰で夏の訓練に耐えながら山の中で玉音放送を聞き敗戦を知った。当時の苦勞を思うと今年の暑さなどは別にたらくとも思えず農作業に精出す毎日であった。父は九十一歳、母は九十三歳で天寿を全うした。その両親の年齢までは頑張りうと目標を立てている。

武田信玄の格言に「為せば成る、為さねば成らぬ成る業を成らぬと捨つる人のはかなさ」というのがある。私はそのことをモットーに学校教育や社会教育で実践した。

昭和四十六年四月、県教委社会教育課へ配属され、公民館担当となり、西も東も分からぬ行政職として勤務することとなった。

八年間新しい分野の仕事の中で白石知事の負託に応えようと懸命に知恵をしばった。

知事の発想は「県民の目線で事に当たれ、知恵を出せ」とよく言われ、金がないから仕事が出来ぬと言わぬ。「金は仕事について来

る、目にももの見れば予算はつくものだ」との厳命を受け、課内全員で知恵を出し合い、「心を豊かにする公民館活動助成金」の制度を創設し、①三世交代交流活動②伝統文化継承活動③家庭教育学級④スポーツ活動⑤新しい創作活動等をテーマとする公民館活動を中央公民館は五事業、地区公民館は三事業実施する場合、活動助成金補助を行う制度とし、中央館は二十万円、地区館は十万円として予算化に成功し、県下七十市町村の公民館活動の画期的振興に成功した。

その経験を学校経営に生かして中山中学校では、PTAと知恵を出し合い、赤いジウウタンの卒業式を創設し、現在も踏襲されている。



松前小学校では、伝統文化として「はんぎり競漕」を取り入れ、プール開きのセレモニーにした。今では町の夏祭りのイベントとなり盛大に海で行われるようになった。又、和太鼓を創設し、「義農太鼓」と銘打って伝統文化となっている。

退職後、縁あって教育行政にたずさわり、文化センターの建設や庁舎の新築など町長の補佐役などを務め、湧水太鼓の創設をはじめ

松前夏まつり、町おこし演芸名人会、町民憲章の制定、松前音頭の創作などに全力投球をしたものだ。七十二歳で現役生活を去り、晴耕雨読の日々を農作業にいそむかたわら「文化協会」会長となり伊予万才に趣向を凝らしている。

お蔭で五体満足、風邪もひかず毎日元気で二十アール余りの畑に、さつま芋、里芋、スイートコーン、ソラ豆などローテーションを繰り返しながら汗を流している。

別添の写真は、この十年間、試験的に始めたスイートコーンの年間四回収穫することに成功した時の証明記事である。

松前の土壌に適応したのか海岸に近いのも幸いしているのか。いづれにしても、やれば出来るという証左になると思う。

私の信条は「三気、五快」即ち①やる気を出す。②本気になって取り組む。③根気強く続けること。④そのため、①快食(不平を言わず気持ちよく食事をする)②快便(毎日気持ちよく排便する)③快眠(夜はぐっすり七時間は寝る)④快労(昼間は気持ちよく汗を出す。働くこと)⑤快樂(心をリフレッシュする趣味活動などで楽しむ)。このパターンで生活すれば長寿健康まちがいなしである。

私は毎日欠かさず自家製の「黒にんにく」を朝食後、一片のみ食している。何よりも効果的である。是非皆さんにおすすしたい。最後に私の好きな詩を紹介する。(県教委で課長から教わった)

## 青春

青春というのは人生のある時期を言うのではない

心の状態を言うのである  
優れた創造力、たくましい意志、燃える情熱、安易を排する冒険心、これらを兼ね備えた状態を青春という。

年を重ねただけでは人は老いない。理想を失った時、初めて老いが来る。

皮膚のシワは歳月と共に増すが情熱がある限り精神はしほまないつにならうと、人は信念と共に若く、疑惑と共に老いる。

人は信念と共に若く、恐怖と共に老いる。  
何歳にならうと希望ある限り人は若い。いつにならうと人は情熱がある限り若い。

この詩をいつも心の中でつぶやきながら百歳を目指して頑張ってみたいと思っている。  
日野原重明先生のように!!



(平成 27 年 11 月 25 日 日本農業新聞で)

「生徒の心に寄り添う教師」を目指して  
松山市・内宮中教諭 村上 寿恵  
文芸……………(19)

川 柳「来し方行く末」 岡本 恭子  
水墨画「努力と意欲」 西島 節子  
短歌「濃き影なして」 井上真佐子  
俳句「四季を詠む」 今井 忍  
俳句「白句自解」 谷井 紀夫  
先輩を偲ぶ……………(22)

林傳次先生遺稿集「把翠」を繙く(十二)  
会員の声……………(23)

「教職の退職を前にして」  
北吉井小学校長 高須賀秀喜  
「昭和二十七年入学の頃の思い出」  
小野植元幸  
「ロシア兵墓地清掃奉仕活動」に参加して  
菅田 顕  
表紙作品「羽ばたく樹」について  
支部だより……………(26)

伊予支部「落語二連発 in 松前」  
小笠原 義・渡辺 正治  
学部トピックス……………(27)

・教育学部の市川克明准教授が率いる木管五重奏アンサンブル「旅縁」が演奏会を開催しました  
・《科学イノベーション挑戦講座》受講生が光合成を司る葉緑素の単離と銅クロロフィルの調製に挑戦しました

愛媛大学ミュージアムへの誘い  
叙勲・受賞……………(29)

寄付者・会報送料送金者名  
敬 申……………(30)

原稿募集……………(24)

放送大学後期入学生募集……………(21)  
「第六回愛媛大学ホームカミングデー」を開催しました……………(31)

# 学部 の 今

松山市立清水小の

## 「朝の読み聞かせ」 活動に参加して

教育四回生 国語

早馬 美香

私は三回生のときから清水小学校で行われている「朝の読み聞かせ」に参加しています。清水小学校の読み聞かせボランティア「ころの会」の方と一緒に、毎週月曜日と金曜日に設けられた朝の時間に本の読み聞かせを行い、子どもたちに様々な本を紹介したり、本のおもしろさを伝えたりすることに力を注いでいます。読み聞かせ後には、その日の感想や反省を書き、次の活動に活かすようにしています。また、その日の子どもたちの反応を伝え合い、他のクラスではどのような反応があったのかを共有しています。

この活動を通して、読み聞かせ



に対する考え方ががらっと変わりました。活動への参加を決めたときは、授業や実習などで読み聞かせを行ったことがあったため、「読み聞かせをするのは簡単だ」と考えていました。しかし、いざ活動を始めてみると、その考えが甘かったということに気付くことができました。声の抑揚や強弱のつけ方、声色の変え方や読む速度、間の取り方や子どもたちの反応に合わせた読み進め方……読み聞かせを行うにあたって、様々なテクニックが必要であること、それらが自分に十分に身につけていないことを身染みて感じました。読み聞かせは奥が深く、行えば行う



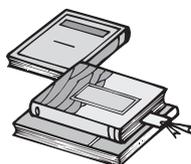
ほどその難しさを感じています。同時に読み聞かせのよさや素晴らしさも感じています。

活動に参加するようになって二年目となり、ようやく子どもたちの反応に応じながら、堂々と読み聞かせを行うことができるようになってきました。読み聞かせを始める前や後に、読む本にまつわる話をしてみたり、内容に係るクイズを出してみたりするなど、自分なりに工夫して読み聞かせを行っています。読み聞かせを行っているときの、子どもたちのキラキラと輝いている目を見るたびに、本のおもしろさを少しでも伝えることができていると感じ、嬉しく思います。時には思うように反応が返ってこなかったり、盛り上がりすぎてしまったりすること

もありますが、失敗や成功を繰り返しながら、読み聞かせの力を磨いています。

また、学生のうちはなかなか保護者の方と関わる機会がありませんが、この活動では保護者の方と話をしたり、保護者の方の思いに触れたりすることができ、貴重な経験を積むことができています。

「このクラスでは今こんな授業をしているんですよ。」「子どもたちはこんなことに興味をもっているみたいですよ。」といったころの会の会の方の声からは、子どもの興味・関心に合わせたり、学校生活に関連させたりして読み聞かせに使う本が選ばれているということを知りました。ただ読み聞かせを行うのではなく、子どもたちの実態に合わせて本を選ぶことで、本に対する興味・関心を高めることができるのだと学びました。同じクラスの担当になった「ころの会」の方から、その日どのように読み聞かせを行うか打ち合わせをしたり、「最近是这样いことがあったんです。」と、子どもたちの普段の様子を聞きながら教室に向かったりすることを通して、ころの会の方との関係づくりにも努めています。



読み聞かせを通して、私自身も数多くの本に出会うことができました。子どもたちがどのような本に興味をもっているのかを知ることができたと思います。まだまだ自分の知らない本、読んだことのない本との出会いが待っているかと思うと、次の活動が楽しみです。これからも「ころの会」の方と協力して、子どもたちと本の出会いを繋いでいきたいと思ひます。子どもたちが本の世界に飛び込み、楽しむことができるよう、私自身も本の世界を楽しみながら活動を続けていきます。

松山市子ども健全育成事業

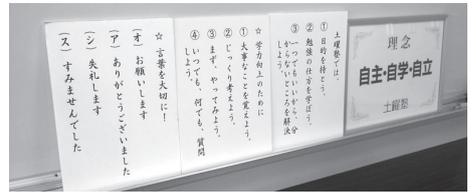
『土曜塾』に  
参加して

教育四回生国語  
白木 俊宏



私は一回生のときから愛媛大学フレンドシップ事業の「松山市子ども健全育成事業『土曜塾』」に参加しています。土曜塾とは、経済事情で塾や家庭教師を利用できない世帯を支えようと二〇一二年に始まったもので、毎週土曜日午前九時から午後四時まで行われています。私は土曜塾が始まった当初から参加してきましたが、この土曜塾には本当に多様な子どもたちが集まっています。勉強に意欲のある子、教科の好き嫌いによって意欲が変わる子、勉強が嫌いな子、机の前にじっと座って

ることすら苦痛の子……。そんな子ども一人ひとりの実態に合わせて大学生がサポーターとして個別に指導していきま



す。意欲のある子ども、得意な子どもにもは応用問題が多く載っている問題集を解いてもらうこともありますが、逆に苦手な子どもには塾で用意している小学生用の問題集から地道に取り組んでもらうこともあります。サポーターをしていて難しいのは、その子どもに今必要な指導はどの段階のことなのかということを見極めることです。机の前



じっと座っていることもままならない子どもに対してはどういう話題や教材を持っていけば座っていただけるのか、勉強が苦手な子どもはどの学年、どの段階での勉強からできなくなってしまうのか、そこを見極めてその子どもに合った指導が求められます。その見極めをしていく上で、その子ども

必要だということを学んでいきました。その子どもの学力はもちろんですが、それ以外にもその子ども



# コミュニケーション能力を発揮した 魅力的な生き方講座

やのひろみ氏  
(平九年卒)



今、ハードルを高くして紹介されました「やのひろみ」と申します。初めての方が殆どだと思います。「やのひろみ」と言う名を聞いたことがあると言う人は？では、知らなかったと言う人は？はいありがとうございます。男子学生さんの方が知らなかったと言う人が多いようです。

そこで、今日はその方達の為にあつて来たようなもので、平仮名五文字の私です。皆さんには是非覚えて帰って頂きたいと思っております。

この会に参加して頂いた方々は、一回生から大学院生までの幅広い参加を頂いていて、将来は教



員志望の方が沢山占めていることが分かりました。

では、先ず、自己紹介をさせて頂きます。私も愛媛大学教育学部を卒業しました。私の専攻過程は、今は存在していませんが「情報社会課程生活文化コース」でした。零免コースなので教員免許は持っていません。

私は、小学校から体育の先生になりました。高校時代ハンドボール部に入っていて、大学も同じ部に入部しての一回生の時、左膝の前十字靭帯が断裂しまして、次に、右膝の同じ箇所も切ってしまい、もうハンドボールは出来なくなってしまうました。小学校以来熱望していた体育

の教師を大学に入ったとたん断念してしまうことになってしまいました。当時は大学を辞めようかと思つた程のショックでした。

その後、たまたまわたくしのクラスにいた友達に、あるサークルに誘われて行つたのが大きな転機となりました。そこで皆に勧誘され入つたサークルとは「放送研究会」でした。ついに、私の大学生活の大半はそこで明け暮れの日々を過ごしました。その間断裂した左右の膝の手術を六回し、車椅子や松葉杖で大学に通っていました。

今年、この放送研究会は設立五十周年記念会を迎え、九月に盛大なパーティーを開催しました。この研究会からは、大勢のマスコミ関係者を輩出しています。

私は愛媛大学を辞めなくてよかったなあとつくづく思っています。これも悩んでいたときに良き友達と出会い、彼女を通してサークル活動に出会い、色々な出会いの機会に恵まれたこと、人生は良いことも悪いこともありすが、苦境に出会つたとき、くしゃつとならずに、そのことを逆手にとつて、なにくそ！という気持ちでもつて良い方向にもつていけたら道は自然と拓けてくるものだなあと改めて感じました。

今私は、このような喋りの仕事をして十九年目の終盤にさしかかっています。私の卒業の頃は、

特に女子には就職水河期でして、四回生の後期にも決まつておらず、松葉杖をついてのアルバイトをしていました時、これもたまたまだつたのですが、サークルの先輩からの紹介で、道後のホテルで結婚式場の音響・照明のアルバイトをしていた時、その結婚式場に司会者として来られていた企画制作会社社長さんでもありました方から、君は大変面白そうに興味を持てた、うちの会社に来月から来ないかと言われました。半信半疑の気持ちで会社に向き、二時間程お話を聞いて「よし採用！」ということになり、信じられない

気持ちで入社しました。そして晴れて卒業そして就職ができました。これまで実に「たまたま」と言う出来事はばかりで今がある感じがします。

私はこの事から、学生生活をしていた接した教員以外のことがチャレンジ出来るこの学生時代のうちに色々チャレンジして頂き、興味あることは色々経験しておいてほしいなあと強く感じます。

今日の講話タイトルにもある「コミュニケーション能力」についてですが、何がポイントなのかと言うと、コミュニケーション能力を磨くには「いろんな人と話をする」という以外に多分、方法はないと思います。自分がその経験の中で、痛い目に遭つたり、しんどい思いをしたり、やばいなあと思つたり……そういう経験の積み

重ねが、その能力を高めていく唯一の方法ではないかなと感じています。私もまだまだ勉強中で、今もこれが出来なかつたなあ、あれが出来なかつたなあと何時も反省しながらの十九年です。

従つて、今日は、話し方の虎の巻というよりは、これまでの経験談、失敗談、普段心掛けている事とか、今私は四十歳ですので、二十年前の自分にこれは先に教えてあげていたらよかつたなあと思うことを、話をさせて頂きたいと思ひます。

「フリーパーソンナリテイ」の私の仕事は、テレビ・ラジオ・イベント司会など、いろんなことをさせていたいただいているのですが、その中のひとつに、原点ともいえる仕事なのですが、南海放送ラジオの仕事をしています。今これから皆さんにパンフレットをお配りします。これには、「ラジオ」を携帯電話でもスマートフォンでもダウンロードして聞くことが出来る方法が書かれています。それで全国のAMラジオのキー局の番組が何時でも聞けます。どうかトライしてみてください。

毎週月曜日の夜七時から九時までの二時間生放送しております。同じくフリーパーソンナリテイの、らくさぶろうさんと一緒に出演して「らくさぶろうとやのひろみの月曜パワフルレディオウ『らくやのお!』』という番組を、十三年程毎回台本なしの完全フ

リートークでしています。

今年の八月三十一日に七百回スベシャルを迎えました。大勢の方が次々と出演してくれました。記念写真を撮ったり、色々アイディア溢れる、まさにパワフルなラジオ番組になりました。

私はラジオは魔法の箱だと信じて携わって来ているのですが、ラジオネームしか知らない人とても妙に仲良くなれます。また、毎週金曜日の午後二時から四時半まで「TIPS」という生番組で喋っています。私は、ポケベルの時代からラジオパーソナリティの仕事させてもらっています。今はSNSとかライン、インターネットが主になっています。インターネットは便利な反面、大変恐ろしい面があります。ラジオの生番組では、メールで主にメッセージが送られてきます。他にはFax、電話もあります。

生放送をしている私の前には、ノートパソコンがあり、それを立ち上げているとワットとメールが飛び込んできます。年に一、二回位、「死ね！」というメールが来た事もあります。冗談ではなくて、何で「死ね！」というメールが送られてくるのかと言えば、好きなことは好き、嫌いなことは嫌い、所謂「歯に衣を着せない」ではっきりと思ったことを言いますので、結構敵が多いようです(笑)。二十代の頃に多かったのが「死ね!」「生意気横着ぞうだ、偉ぞう、わかっ

たことを言いやがって、女のくせに」というのが多かったです。最近はやつとそのようなことは送られてこなくなりました。

今は何とも思わなくなってきたが、二十代の時はちよつとシヨックでした。そもそも、なんで喋り手の仕事を始めたかというのと、もともとは裏方志望だったのですが、たまたま卒業して半年ぐらい経ったとき、「女子大生だけを集めてラジオ番組を創ろう」との企画が出て参りました。それぞれ愛媛にある五大学に働きかけ五人の大学生を集めようとしたのですが、四名しか集まらなくて一名足らず、しょうが無いからお前入つとけといわれて驚きながら参加したのが初めてでした。

話し方の基礎基本ができないし、喋り方は汚いし、ものの言い方も分かっていないため、それで結構苦情の電話が入ってきたものです。その苦情がメールになってくるとやっかいです。面と向かい合われると共感とか表情がよく分かっていいのですが、今、SNSとかラインとかを小中学生が知っている現場はこのことで大変悩んでいるということが、私にはよく分かります。

中学校では、携帯を学校に持つてきてはいけないという校則になつていて、インターネットの正しい使い方、マナー等を教える必要はないと言うスタンスの学

校も少なくな、ちよつとしたボタンの掛け違いで、他の問題行動へと発展して行く傾向があります。

今後、皆様が教員になる頃は、おそらく交通ルール、安全教室を教えることと同じようにネットのルールの指導も必ずすることになってきていると私は思います。

その点で皆様もこれからご自分のものを使うときには遠慮無く使つて欲しいのですが、特に言葉のチョイスについてはよく気を遣つて欲しいと思います。大変便利なツールですが、反面大変怖い面もあることをしっかりと意識して使つて欲しいです。

また、テレビのお仕事もやらせていただいてまして、レギュラー出演させてもらっているのが、愛媛朝日テレビの5チャンネルで、毎週木曜夕方六時十五分「スーパーJチャンネル愛媛」に出ています。

また、TV、ラジオを通して、最近では高校生と接する機会が多く、「書道パフォーマンス甲子園」の司会を第一回からずっとさせていただいたり「俳句甲子園」実行委員会の理事をさせていただいて、全国的に高校生と関わりを持たせて頂き、本当の素晴らしいパワーをもらい、顧問の先生方や保護者の方達ともお付き合いが出来ているのも、もともと教員を目指していた自分としては嬉しい瞬間です。

私の仕事は資格はいりません。皆さまも明日からでも出来るのですよ。この仕事をしてきて何が残っているかといえ、やはり人とのお付き合いです。それこそが十九年の全てと言えます。リアルに人と出会い、リアルに人と話が出来て、毎日勉強をさせてもらっているという、そのような仕事と言えます。初対面の方がとても多いので、その時に気をつけているのは言葉のチョイスと観察力と想像力、その人を知りたいな、その人の好きなものは何かなあと考えること。この人はこんな言葉を掛けたら、どんな気持ちになるのかなあという想像力、これは多分結構キーワードになるのではと何時も思っています。



この仕事に携わっていて、「日本民間放送連盟賞」というものを、ありがたいことに何度か受賞させて頂きました。放送業界の中で、このような賞があるので、全国大会の表彰式に呼んで頂いたこともあります。



「放送批評懇談会ギャラクシー賞(ラジオ部門DJ・パーソナリティ賞)」も受賞しました。この賞は、放送業界の中で一番権威のある賞と言われています。このギャラクシー賞ですが放送批評懇談会に属している専門の方が年間TV、ラジオの番組をいろいろ視聴し批評し合つてその中で、CM部門番組最優秀賞とか、最優秀ラジオ番組賞とか「ドキュメンタリー賞」とか、色々な賞があるのですが、その中から、第四十七回ギャラクシー賞のラジオ部門からパーソナリティ賞を受賞しました。年間一名だそう。TV部門の方は笑福亭鶴瓶師匠です。授賞式の時のですが、この東京での授賞式には私は、私の二番目の子を出産したばかりの時でした、東京へは行けなかったのです。テレビ部門で受賞された鶴瓶師匠と違って、私は愛媛でしか喋っておられませんので、会場で私の名前が

発表されたときは、会場の人達は「やのひろみ」で誰やと言うことになりました。しかも授賞式に欠席してまず、「こんのかい！」というオチです(笑)でもこうして、一生懸命やっていることを誰かがしっかり観てくれて、そしてちゃんと評価してくれているというのは、私にとっては思いがけない、最高のご褒美になりました。ド素人からはじめても、こんな風な賞をいただけるのです。リスナーさんやスタッフの皆さんに心から感謝した一生忘れられない受賞です。

次の写真ですが、小学生にも大受けの写真です。これは「私の母乳」の写真です。何故この写真をといたことですが、私には幼稚園と小学生の二人子どもがいます。二人とも出産ギリギリまで仕事をしていた、出産してからは一ヶ月後に復帰しました。仕事中は三時間毎に母乳を絞り、それを保冷剤を入れたものに保管して家を持って帰り、冷凍庫に入れて夜中、これを自然解凍し、赤ちゃんをあやしながら飲ませてもらったもので



何故母乳の写真を見せてこんな話をしてくれるのかと、いいかといひますと、私の二十

歳頃には、これから就職するが、何時結婚して何時子どもをもうけるか……などという将来の人生設計的な考えは微塵もありませんでした。やっとなんか就職ですから、当然一生懸命働きます。何かと嫌なことや理不尽なことにも沢山出くわします。それでもなにくそっと頑張っていくんです。そうしていると、何年かして一寸だけ責任ある仕事を任せられます。それが二十代後半です。少し仕事が面白くなってきました。もう一寸続けていて三十歳位になった時、はたとふり返るのです。あれ？私は何時結婚するのか。子どもって欲しいよなあと。その時、初めて真剣に「結婚、出産、育児」について考え始めるのです。実は、少子対策の仕事もしていて勉強させてもらったのですが、三十歳になると焦りだして、三十歳後半になると高齢出産になってしまうから、今結婚しよう！と結婚を決めたりなんかして、そして新婚生活が始まりますが、それでも子どもができないことがあります。それで悩みが色々でてきて、その為の手立てをします。愛媛県でも不妊治療をしている方が六組に一組だそうですね。全国的に見ても変わらぬようです。就職して仕事もとても大切なのですけれど、ライフプランというものを今から考えて、その通りにはいかないかもしれませんが、そういうことを今からおぼろげでもいいので考えて行く、考え

ておく、ということがとても重要だなと感じます。例えば、二十歳になったら女性の方は婦人科に一度必ず行ってください。ちゃんと男性も女性も一度は検査して欲しいのです。何故かと言えば、婦人科系の不具合だったり不妊治療などはスタートが早いほうがいいのです。少子化ジャーナリストの白河桃子さんに伺ったのですが、卵子も精子も老化していくそうです。医学的には明確になっていて、保健体育の副読本に入れてはとの議論がされているようです。医学的には二十代の時が子どもを授かる為の条件が一番良い時期なのです。その事を知らないとか、無視とかして三十代に入り不妊治療をした方が私の周りにはとても多く、子どもを諦めた友達も居ます。もしもご自身が望むならば、出産育児とう経験もしてほしいなと思うので、想像でも良いですから今からライフプランを立てておいて下さい。

これも白河桃子さんから聞いた話ですが、日本のコマーシャルにある「卵子は老化するのです」を観たドイツ人は大変驚かれました。ドイツでは皆学校で早く教えられるらしいそうです。知らないことは怖いものです。そこで、一生のことなので皆様は今一番良い状態なので是非調べておいてもらいたいと思います。

私はフリーランスで仕事をしています。決まった放送局に属して

はいないので。何処の局にも出て良いのです。しかしながら、いつ何時、「明日から来なくてもいいよ」と言われてもいい立場にいます。とても危うい立場にいます。折角誰にも縛られていないので、自分が良いと思う方向に向かっていくようにしていきます。迷ったときには一歩勇気を出して前に出て、何かともかくやってみる。やれば必ず動き出します。それが必ず次に繋がってくるのです。

四十歳になって、何かしていたらどこかで色んな人と本当に繋がって行くものだと非常に強く感じます。出来そうでないからもう辞めておこうなどと考えずに、是非、先ずやってみてから考えて欲しいと願っています。

私がかから実施しているものに、十年以上も継続して活動して



いる「ゴミ拾い」をしながら同時にラジオの番組を進行していく活動があります。マイクを持ってひたすらゴミを拾うという活動で、ゴミを拾っていると色んなものを拾います。海岸に行くと、よく拾うものに「紙おむつ」があります。多分お母さんや大人の方が捨てるのでしょね。最近のおむつは、あの四国中央市で作られている質の良いものですから、排出物が漏れない、吸収力がよい素晴らしい製品になっていますから、海水を十分吸収していて、凄く重さになっています。その他にはお弁当の残りのような捨てられた白米を驚き嘆きながら拾ったり、理容実習に使っていたのかマネキンの頭だけが複数個捨てられていたものも拾いました。これら全て大人の仕業ですね。最近ではゴミ拾いをイベントにし



ようと、ゴミを只ひたすら拾うだけの地味なイベントですが、大勢の人が集まって下さり、貴重な方々と感謝しています。

この写真は松前の塩屋海岸ですが、拾い初めは大変汚い海岸でしたが、実に綺麗に変貌していくのは気持ちの良いものです。このイベント名は「G O M I X ! (ゴミックス)」です。何故この活動かと言えば、無駄に捨てる人が無くなるのを願って、また愛媛が少しでも奇麗になればいいなあと願っての活動です。



ところで、今日は久しぶりに大学のキャンパスを歩いて、大変変化に富んでいて綺麗な環境になっているのに驚きました。道路を含め曲線が多いこと、タイル貼りが

あることに気が付きました。私達の頃は殆ど直線の構造、構成の景色ばかりだったものだから。今は、休講があるときはメールで知らされるようですね。私たちの時代は大学の掲示板まで出向いて確認していましたね。

さて、この写真はカンボジアでも地雷処理や不発弾処理の活動をされている、高山良二さんです。もう十五年も活動されている方で、元自衛隊出身(五十五歳退官)の地雷処理専門家です。砥部町に住んでおられますが、しばしばカンボジアに行っておられます。

私は新聞で高山さんの記事を読み、凄い方だなお目にかかってみたいと思ひ、会いたいことを何時ものように彼方此方で行ってしましたら、たまたまこの方がラジオの番組にゲストで来て下さいました。チャンスと思ひ早速メールアドレスを交換して、今はメル友になつています。来月十二月二日に日本に帰ってくるので、会えたら良いねと、つい先ほどメールが送られてきましたので、先ほど私も



お会いしましょうとメールを返しておきました。

この方は、カンボジアのタサエンという所で地雷処理活動をされています。住民参加型の地雷処理活動をしていきます。現地の人に働いてもらって、お金を払って地雷処理活動をしています。この写真は松山市にある「国際地雷処理地域復興支援の会」の事務所です。私も理事の一人として末席に座らせて頂いております。

地雷処理の方法は、地道にコツコツと地雷探査、探索を進めていって発見すると、処理のための目印の標識を立てるので

ところで、カンボジアには、どれ位の地雷があるかと言え、勿論正確に数えることは出来ませんが、推計四百万から六百万個と言われており、高山さんの代では絶対には終わらなくて、おそらく五十年百年と地道な活動が続けられるようなことになるなあと高山さんはおっしゃっています。

住民参加型の地雷処理活動も、この様に専門家には女性の方も多くいらつしゃいます。また、彼女たちが乗っている自転車ですが、松山市から贈られた自転車です。と申しますのも、松山で放置された自転車が入りますが、高山さんからメールが入りまして、カンボジアでは現場に働きに行くのに舗装されていない道を歩いて二時間位かかるので、大変だから、

丈夫な自転車があったらいいのだがと行ってこれ、松山市と交渉して、もう廃棄処分する前の自転車があるとのことで、百台程送らせてもらいました。

地雷処理の最前線は殆ど女性の方が大勢います。それも現地の状況を考慮して十八歳から二十四歳までの貧困層の若い女性の方をテストして採用しています。

私も出来る範囲で、愛媛でも長く応援出来るものはないかと考え、不定期で「笑顔の為」と言う名を付けて、文房具を集めて送っております。カンボジアの子ども達は文房具をちゃんと持っている子はあまりいません。中には、株式会社世界地図とい

\* \* \* \* \*

う、その名の通り世界地図を販売している会社社長さんに世界地図を寄贈して頂いたこともあり、カンボジアにこれを送りました。カンボジアの大人の方でも、自分の国を世界地図を見て指し示すことが出来ないほどなので、勿論子ども達は殆ど分からないようなので、地図も一緒に送ったのです。また、楽器も学校にないとのことなのでリスナーの皆さんに、楽器も自由に送って下さいと呼びかけお願いしましたところ、ピアノ、大正琴、エレキギター、トランペット、カステネット等々実際にバラエティに富んだものが驚くほど沢山集まりました。それも全部船便で送らせてもらいました。



これは、私が大変気に入っている写真です。現地での贈呈式の写真です。この写真からは、言葉は伝わらないのですが、この女の子の写真を見て下さい。こちらの心が温まるような素晴らしい笑顔から、本当にありがとうございますと思っ

この様に大事に受け取ってもらう人がいるのだなあと思うだけで活動して良かったなあと思うづく感じますね。行ったこともない、繋がったこともない人達だけで、何か心が通じあえたような気持ちになります。

今、愛媛県では、高山さんが活動している村から、二人の留学生を受け入れています。一人は東雲大学生のタンチェンターさん、一人は聖カタリナ高校生のリスラエンさんです。二人とも現地で高山さんについて日本語を学び、日本で語学の勉強をして、将来は日本



とカンボジアを繋ぐ人になりた

「家族は命です」との回答が返って来ました。その時は返す言葉を失ってしまいました。十七歳の女の子がこんなにも家族のことを考えているのだなあ。この当たり前のことのように家族は命だと答えた彼女を愛媛で応援して欲しいと強く思いました。

もし興味のある方は「国際地雷処理地域復興支援の会」のHPがありますので開いてみて下さい。

この写真は、三・一一に関する写真です。私も何かお役に立つものはないだろうかと思つて、二〇一二・七松山市の子ども達に絵を描いていただき沢山集まりましたので、愛媛県社会福祉協議会にお願ひして東北地方に送って頂いた時の一部です。

私も砥部焼大使第一〇六号として、砥部焼の窯元さんたちとも、仮設住宅で暮らしている方々に何か送れないかということで、お茶碗などを送ろうということになり、それを送りました。

また、愛媛県はミカンの国ですから、新居浜の方で近藤千年さんという方がいらつしやるのですが、一二・一一・五にご夫婦お二人で東北に向向き、被災の現状を見て、つくづくこれは大変だと



思つたのを機会に、それから定期的に車で東北地方に向いて行かれる事になったので、その方にミカンを託して送ってもらったことがあります。

これは鬼北町で撮つた写真ですが、先ほどお話ししましたテレビのニュース番組「スーパーJチャンネルえひめ」のコーナーで、「笑顔見つけた！」というコーナーがありまして。リアルにアポなしで色々出会った人に突然声を掛ける、凄くざつくりとしたコーナーを五年ばかりしています。本当

にアポなしのリアルな方法で突然飛び込んでいくスタイルを貫いています。これを取り入れたのは二〇一一・四スタートでした。初めて行った所は上島町でした。その時最初なので突然誰も知らない所へ飛び込んで、おじさんに「笑顔見つけたの取材で来ました」と言ったとき、その時その農家のおじさんは、「こんな大変なときに何で笑顔見つけたぞな」と叱られたのですが、私は「こんな時だからこそ一般の人達の普通の笑顔が大切だと思うのですが」と答えたことを鮮明に記憶しております。それを常に心していま

話を元に戻します。アポなしで突然訪問した鬼北町で、丁度写真展を開いていました。何だろかなと覗いてみると、「笑顔で手をつなぐ」と言うテーマで写真を展示していたのです。近永カメラ店のおばちゃんが撮っていました。震災後の光景をTVで見ている、東北のカメラやさんが瓦礫の中などに散乱している泥まみれになった写真を一枚一枚丁寧に拭いている映像を見て、これは何かしなればいけないあとの思いに駆られ、行き着いたテーマで鬼北町からその写真を撮り始めたそうです。それを二千枚撮って、福島に飾りに行ったとき、その場にたまたま来ていて、その写真を見たのが此処に映っているこの方矢口洋子さんです。この方も写真を撮る



のを趣味にしていますので、その場で感動し力をもたらったところで、彼女もそこから、福島でも三千人の笑顔の写真撮りまして、それも併せて五千枚の写真の展示をされました。

私はラジオの仕事をしているのでラジオで何か役立つことは出来ないかと、二〇一一・三・二四からずっと続けているコーナーがあります。「えひめからつながらター」というコーナーです。内容は被災地の今を被災地に生電話をつないで教えてもらおうと言うことです。最近ほめつきり報道も減っているし、映像でも綺麗に編集されたものが報道されていることがとても多いので、ラジオは電話を繋ぐだけでいいので、敢えて生で編集せずに、貴方が今思っていることを教えて下さいと呼びかけ、それに応えて頂くことを、今も続けているのです。現在までに二百三十人位の人を取り上げています。

今年の二月には、南海放送さんのご支援を頂き、私も東北の方へ行かせて頂きました。そこで、今までに繋がった方々にお目にかかりに行こうということで、岩手県に在る田老という所の「たろう観光ホテル」に行きました。国のプロジェクトに「震災の爪痕を残しておこう」と言うものがある、震災遺構第一号に認定されたホテルです。土地の人も賛否両論がありました。そのホテルの社長さん

のたつての願いで残すことになったそうです。そのホテルの六階の内四階まで津波が押し寄せてきたそうです。社長の松本さんは条件反射のように地震が来ると何時も屋上に上がってビデオを回したそうです。今回の地震も記録に残しているのです。従って、その出来事をちゃんと伝えなければいけないだろうと、彼は敢えてそのVTRを観光客の人に公開をし、津波の恐ろしさ伝えているのです。

彼はこの様なことがあってもこの土地を愛し、大好きなので、再度五十メートルの高台の所にオーシャンビューが大変素晴らしい観光ホテルを建て、今年の夏から営業しているのです。

この方達の思いを私達は忘れずになんと伝えていかなければならないと思っています。

この写真は、お笑い芸人サンドイッチマンと共に撮った写真です。この方達は東北の仙台出身の方でして、故郷の仙台で番組を今も持つておられます。そこで私の



方からダメ元で、私の方で特番するので、サンドイッチマンにインタビューさせていたできたいのですが（彼らは震災当時気仙沼にいらつしたことも存じ上げていたので、だめですかと事務所にお伺いしましたところ、たまたま私が東北の方へ出向いた日に、放送局にいるから十五分位だったらいいよとお返事を頂きました。早速お伺いして、事情を説明してこの番組のためにインタビュー頂きました。その時の三・一一の夜、ホテルにあった一本のロソクの明かりの下で、皆と一緒にロビーで過ごした時の情報源はラジオだったという話をお二人から伺いました。この時熱意と情熱をもって、もともとダメ元だと思っても、それでも何でも聞いてみるという気持ちを出したら、案外繋がっていくものだなあと思いました。

そして、三月十八日、三時間の生の特番を放送することが出来ました。放送の中に、今此処にご出席されている、高橋裕郎先生にも地質学のプロとしてご出演頂きました。

本当に色々信じて続けてやっていくと、色々な縁が繋がっていくものだとつくづく感じます。私の中では一番忘れられない特別番組になりました。

与えられた時間も残り少なくなりました。私のコミュニケーション能力養

成にけっこう役に立ったのは、実は大学時代に焼き鳥屋のバイトをした事でした。来客もお酒を交えての事ですから、そこには色々な間性や人間模様を見せる酔客の応対をするのですから、私は自然に結構鍛えられました。

ところで皆さんは、大学時代のゆっくり考えられる四年間の間に、色々な経験をして欲しいと思います。迷ったら是非前に踏み出してやってみて下さい。それが教員になった時にも絶対に役立つと思います。教員という仕事は、子ども達の人生で初めて自分の人生を大きく変えられる大きく影響を受ける他人の一人だと思っています。初めて学校へ行行って、身内以外の人から叱られたりとか、本気でぶつかり合ってくる他人はそんなにいないと思います。



そんな子どもの人生を変える可能性の在る一人に皆さんがなるのかなあと思うと本当にかげがえない仕事ですから、どうか皆様、常に心と人生にゆとりをもって、広くそして多くの方々と共に生きる良き社会人、先生になるべく是非全力で頑張ってくださいと願っています。



## 学生プロジェクト研究 「藍染め伝統文化の次代への継承」事業を 附属小学校で実施しました

平成27年9月19日（土）、学生プロジェクト研究の一つである「藍染め伝統文化の次代への継承」事業で、教育学部附属小学校の土曜学習「藍染めをしよう」を実施し、1～6年生27人が藍染め体験に参加しました。

本学は、「自己表現能力を高める教育を実施し、自ら考え実践する能力」（中期目標）を持つ人材の育成を教育目標に掲げ、こうした能力を身につけるための教育プログラムとして、「学生プロジェクト研究」を行っています。学生プロジェクト研究とは、学生が日頃「自主的に調査・研究したい」と考えているプロジェクトを、大学から経費の支援を受けながら、授業以外の場で「自ら考え実践する能力」を身につけていく事業です。

当日は、教育学研究科2年の和田敬行さんが中心となり、神森貴文さん（教育学研究科2年）、高柳知佳さん（農学研究科2年）、風呂圭祐さん（教育学研究科2年）、橋本愛さん（教育学研究科2年）、三浦孝之さん（教育学研究科1年）、酒井愛奈さん（教育学部4年）、吉金みのりさん（教育学部4年）、富田享さん（教育学部2年）の9人が参加しました。

子どもたちは、基本的な藍染めである「絞り染め」と人気キャラクターのステンシル版画を写し取る「抜き染め」の製作を行いました。

絞り染めでは、木綿ハンカチの生地の一部を輪ゴムを使って思い思いに縛り、染液につけて藍染めをしました。子どもたちは、布を染液から取り出すと緑色から藍色に変化する様子を興味深く観察し、輪ゴムで縛ったあとがきれいに残って白い模様を出す様子に驚きの声を上げました。

また、抜き染めでは、予め藍染めしておいた木綿ハンカチにステンシル版画をのせて、漂白剤を使って藍の色を抜く方法で、型を写し取りました。誰でも簡単に複雑な柄をきれいに写し取ることができること、安全かつ短時間で行えること、子どもたちが好きな人気キャラクターのステンシル版画を用意していることから、子どもたちに大人気の手法です。子どもたちは二つの製作を行って、一つは保護者の方へのプレゼント、もう一つは自分で使用するものにしたようです。

こうして伝統文化に気軽に触れて、楽しい思い出をつくるのが次代への伝統の継承において最も重要です。たとえば、かつて日本酒は口噛み酒とよばれ、口の中で噛みくだいた蒸し米を使って作られていました。しかし、現在、そうした手法で日本酒を造っても誰も飲まないでしょう。昔ながらのやり方を続けることも大事ですが、伝統が忘れられ、途絶えては意味がありません。伝統は時代に合わせて変わってもよいのです。誰もが手軽に楽しく、伝統について考えることができるよう、学生たちは子どもたちと楽しみながら過去と未来を繋ぐ活動に従事しています。

本プログラムは愛媛新聞9月21日朝刊「伊予継承へ児童27人挑戦」で報道されました。



和田さんが内容を説明



きれいな絞り染めの完成

学部最近のニュース



## 教育学部で音楽を学ぶ学生たちが 四国がんセンターでアウトリーチ活動を行いました

平成27年10月18日（日）、教育学部で音楽を学ぶ学生たちが、四国がんセンター（松山市梅本町）でアウトリーチ活動を行いました。

学生による同センターでの演奏は、7月に続き2度目となります。今回、8人の学生（内1人は高校生の客演）が「2015健康実現えひめ in 四国がんセンター」のプログラムの中で、演奏を行いました。クラシックの名曲から、童謡・唱歌・民謡・NHK朝の連続テレビ小説のテーマ曲まで、幅広いジャンルをフルートアンサンブル・クラリネットアンサンブル・三味線のデュオなどで演奏しました。その模様は病室にライブ放映され、利用者に音楽を楽しんでもらう機会となり、好評を得ることができました。



## 教育学部留学生歓迎会を開催しました

【10月22日（木）】



平成27年10月22日（木）、校友会館2階「サロン」で、教育学部留学生歓迎会（後学期）を開催しました。

本学部留学生は、今年度10月から新たに4人の留学生を迎え、現在10人の留学生が在籍しています。歓迎会には、留学生、教育学部長、指導教員、国際交流委員会委員、留学生チューター、事務職員などが一同に集いました。

国際交流委員会の河野特命准教授の司会のもと、三浦和尚教育学部長の歓迎挨拶があり、乾杯でパーティーが始まりました。その後、留学生が紹介され、それぞれ日本語で自己紹介を行いました。続いて、国際交流委員会メンバーが自己紹介を行いました。歓談を通して交流が行われ、和やかな雰囲気の中で閉会となりました。

留学生の皆さんにとって、本学で過ごす留学生活が有意義なものになるよう願っています。



留学生紹介の様子



歓迎会の様子

# 職場だより



## 全力で頑張る



新居浜市

金子小教諭

熊本 英貴

(平二七卒)

中学生の頃からの夢、「教師」という職業に就き、はや半年が過ぎていった。四月、慣れない新居浜という土地に来て、初めての一人暮らし、不安は募るばかりであった。そして、迎えた始業式。全校児童六百名を超える金子小学校の四年生の担任として紹介された。そのとき、私は教師としての道が始まるのだと実感がわいてきた。

初めての学級活動。子どもたちの目がとても輝いていたことを今でも思い出す。この子たちと一年間、何事も全力で頑張っていこうと思った。しかし、「何事も全力で頑張る」という目標を掲げていたが、毎日新しいことばかりで、何をすればいいのか、考える暇も

なく半年間を過ごしてきてしまったように思う。日々、学校生活の中で何を全力で頑張ればいいのかと悩むことも多々あった。そんな時、先輩の先生に、「何も考えず、今やっていることに全力を出せばいい」という言葉をいただいた。

それが、子どもたちと一緒に遊ぶことでも構わないと。それからの私は、何を頑張るのか考えるのではなく、今やっていること一つ一つに全力で向き合おうと心掛けた。驚くことに、そのようにやっている、子どもたちの授業に対する姿勢が変わっていった。やはり、子どもたちには言葉だけでなく、実際に行動で示すことが大切であるということを感じかされたきっかけとなった。

私には、四月から続けて行っていることがある。それは、朝のあいさつ運動である。当初は、子どもたちのあいさつの声の小ささに驚いた。あいさつをしても返してくれないのが当たり前、目を見ず、うつむいたまま通り過ぎる子どもたちも多かった。どうすれば良い

のだろうと考えたときに、大きな声であいさつを続けていくということしか思いつかなかった。そこから毎日、正門の前に立ち、あいさつを続けている。まだまだだなと思うこともある一方で、四月に比べるとあいさつができるようになったなど感じる時もある。これからの成果に期待しつつ、継続して頑張っていこうと思っている。

六月、体育授業で水泳学習が始まった。金子小学校では、四年生で全員二十五メートル泳ぐというのが目標となっていた。しかし、始めの泳力測定では、クラスの三分の一にも満たない子どもしか泳ぐことができなかった。そこからの水泳の授業は、気合を入れてやっついていかなければ目標の達成は難しいなど覚悟した。今年の六月は気温がとても低く、子どもたちは身を震えさせながら授業に臨んでいた。悪条件の中、子どもたちには、「先生、頑張れば泳げるようになりますか。」といつも聞いてきた。そのたびに、「絶対、泳げるようになるよ。」と言いながら、自分自身にも「泳げるようにさせるぞ。」と自問自答しながら指導にあたっていた。六月、七月と指導していく中で、泳げるようになって

いく子どもたちが増えていった。その子どもたちが、満面の笑みで「先生に教えてもらったから、泳げるようになりました。」と言ってきたときの表情は、これからずっと忘れることができないと思う。そのくらい、続々と言いに来る子どもたちを見ると、嬉しかった。教師のやりがいを感じられた瞬間となった。

不安が多い中スタートした教員生活も半年が過ぎ、様々な人たちとの出会いに非常に恵まれているなど実感する毎日である。教材研究で行き詰まり、どのような授業を行えばいいのか分からなくなつたときにご指導していただけた先輩の先生方。私が下手な授業をしていてもしっかりと話を聞き、つけてきてくれるクラスの子もたち。本当に素晴らしい出会いの中で支えられていた半年間であった。一年はまだ半分あり、しんどいことや悔しいこと、挫折しそうになることも多くあると思う。そんなときこそ「何事にも全力で頑張る」を忘れず、子どもたちと向き合っていきたいと考えている。

最後になったが、私は、私の出身地である砥部町にゆかりある坂村真民の詩の一部である「念ずれば花開く」という言葉を心にとど

めている。これは、「いつも心に思い描いた望みは叶えられる」という意味である。私は、自分のクラスの子どもたちが元気で楽しく学校生活を送ることができるといふ望みをいつももち、子どもたち一人一人の花を咲かせてあげられる指導ができるように、日々努力していきたいと思う。



791-0041

新居浜市中村松木

一―三一五二



# 出 会 い



伊予市

郡中小教諭

藤山 千鶴

(平二〇卒)

私はとてもついでにいると思う。

同窓会報の執筆依頼をいただき、これまでの自分自身を振り返って見た。先に挙げた「ついでにいる」の意味。私は、どこへ行ってでも出会いに恵まれている。友達、先生、同僚……。 「教師になりたい」と強く感じることはなかったが、「こんな人になりたい」と思うことは多々あった。それだけ素敵な方に大勢出会うことができた。

幼いときから「教師になる」とはつきりした目標はなかった。しかし、教師になるきっかけになった何人もの恩師に出会うことができ、今の私がある。人見知りしがちな私であったが、基本的に「先生」はとても好きだった。放課後、友達と教室に残り、大好きな先生とたくさん話をした。私にとって教員となる転機は三回。一回目は小学校六年生のとき。小学校生活の中で六年生のときが、一番楽し

い一年間だった。当時、担任していただいた先生が、卒業するときに「あなたならできる。自信をもってリーダーになって。」と、アルバムに沿えた一言。そのときに、その先生のように子どもと関わる仕事がしたいなと漠然と感じるようになった。二回目は高校二年生のとき。将来について考え始めたときに、進路相談の際、当時の担任の先生が「障害児教育を学ぶと人間の本質が分かる。興味があるならぜひ勉強してみなさい。」と言。障害児教育を学べる愛媛大学の教育学部へ進学した。三回目は大学四回生のとき。どんな職業に就くべきか悩んでいたときに、当時入っていた研究室の大好きな先生が「教師はええぞ！教師になれ！」と言。そして、現在の私がいる。大きな決断を迫られるときには、何かしらいつもアドバイスをもらえる。他から見れば流されるように感じるかもしれないが……。先生方の一言一言があったからこそ今の私がある。

教員になって六年が過ぎ、七年目に入った。最初に赴任した学校で担任したのは二年生。「どんなクラスですか？」と同僚の先生に尋ねたとき、「あーAくんがおるクラスやね。」と教えてくれた。校内でも誰もが知っている有名なやんちゃな男の子。毎日毎日、声が枯れるくらい叱り、Aくんとは度々ぶつかった。「やめたいな。」と何度も思いながら、友達にもたくさん愚痴を吐きながら、分らないことが分からない、無我夢中で過ごした一番しんどい一年間であった。それでも、修了式後の最後の挨拶、「来年も先生がいいな。」「楽しかった。」もう一回このクラスがいい。」等、子どもたちの言葉を聞き、「このクラスでよかった。」と涙が出た。その子どもたちも今や中学生。先日、運動会を見に行ったときにAくんに出会くと、「先生、お久しぶりで。お元気ですか？」と声を掛けてくれた。「敬語が使えるようになったんやあ。」と冗談交じりに話す私に、「当たり前ですよ。」と笑顔のAくん。教師をしていてよかったなと思う瞬間だった。

現在、勤務している郡中小学校は、大規模校である。またもや出会いに恵まれ、大勢の先生方から、たくさんのお話を学ぶことができる、とても素晴らしい環境にある。私は、特別支援学級担任として、個性豊かな子どもたちと日々奮闘している。特別支援学級が三クラスあるので、他クラスと連携を取りながら、忙しいながらも楽しい毎日を過ごすことができている。特別支援学級を担任させていただき、五年目になるが、昨年度のこと。朝、学校に来るなり、大泣きをした子どもがいた。「出て行けって言われた。」家ですんどいことがあったようだ。子どもたちは一人一人、様々な環境に生まれ、様々な思いを抱えている。子どもたちが毎日、笑顔で学校に来るとは限らない。「学校がいやだ」「水泳がいやだ」「給食がいやだ」「家がいやだ」……。だからこそ、朝学校に来たときには「よくきたね。」と笑顔で迎えた。

**第17回「愛媛大学ホームカミングデー」開催のお知らせ**

卒業生の皆様、青春時代を授業や研究、サークル活動に励んだ懐かしいキャンパスに戻ってきて、散策しながら恩師との交流、旧友、後輩との交流、在校生との楽しい語らいの時間を過ごしてみませんか。

日 時：平成28年11月12日（土）13：00～  
 ※当日は学生祭も開催されています。  
 場 所：愛媛大学キャンパス

☎ 799-3112 伊予市上吾川 一〇番地

# 出会いに感謝して



伊方町  
水ヶ浦小教諭  
石井由未香  
(平一六卒)

「あなたは、いい先生達にめぐり会ってきたから、先生になったのだろうね。」教員になって何年も経ったあるとき、ふと母が私に言った言葉である。

教員としてスタートを切って、今年度で十二年。小さな頃からなるとなく、「先生っていいな。」と思っていた私が、本格的に教員を志すきっかけとなったのは、中学二・三年生の時に受け持っていた。担任の先生との出会いであった、いつも真っ直ぐに私たちと向き合ってくれる先生がみんな大好きだった。先生を中心にクラスがまとまり、とても充実した中学校生活を送ることができた。その出会いをきっかけに先生になりたという思いが夢となり、今、教員をしている私がいる。  
大学を卒業し、念願の新採とし

て宇和島市の小学校に勤務することになった。内示をいただいた日のことは、今でも鮮明に覚えている。「番城小学校です。宇和島市で二番目に大きな学校ですよ。」と言われた。しかし、土地勘もなく、宇和島のことをほとんど知らない私にとっては初めて聞いた学校名……。期待少々、不安と緊張ばかりのまま迎えた四月。私が担任することになったのは、元氣いっばいの三年生三十人だった。学校のことや地域のこと、何も分からなかった私に、子どもたちは嬉しそうにいろいろ教えてくれた。授業や校務、慣れない日々のことでもいつも精一杯の状態だったが、子ども達の笑顔に何度も助けられた。分かった時のキラキラした目、一緒に遊んだり、話をしたりして楽しそうな笑顔を見ると、教員になってよかったと心から思った。

そして、そんな余裕のない私を支えてくれたとても大きな存在は、周りの先生達だった。授業の進め方、子どもへの対応の仕方など困ったことや分からないことがあると何でも聞く私に、どの先生もいつも丁寧な教えてくださった。学年主任の先生は、近所に住んでいたこともあり、雨が降ると自転車で通勤していた私を車で学校まで乗せて行ってくれた。いつも母のようにいろいろな気にかけてくれ、温かい目で見守ってくれる存在だったので、私は勝手に「宇和島の母」だと言っている。子どもを育てながらテキパキと仕事をする同僚の先生は、憧れの存在で、いつか私もあなりたいといつも思っていた。気がつくと、もうその頃の先生の年になっているのだが、今の私はまだまだ足下にも及んでいない。若さだけが取り柄で、突っ走って終わってしまった初任一年目だった。当時の子ども達に、私は何か残してあげられなかった。今になって、申し訳ない気持ちになることがある。宇和島で過ごした三年間、いろいろなことがあった。宇和島の母と呼べる先生も、もう一人増えた。たくさん先生達に支えてもらい、本当に楽しく過ごすことができた。

その後、中学校勤務や前任校では複式学級担任の経験もした。それまで、複式学級の授業を見たことがなかった私は、机の向きや、授業の進め方など何をどうしていのか全く分からなかった。やっぱりここでも、困ったことや悩みがある度に先生方にいろいろ教えてもらった。小規模校で大変なことも多かったけれど、温かく見守ってくれる地域の方、和気あいあいとした和やかな職員室の雰囲気がとても心地よかった。昨年度で閉校となり寂しい気持ちはあるが、いろいろな経験をし成長させてもらったように思う。



教室の窓から見えるオーシャンビュー

今年度は、新たな学校でのスタートとなった。海の近くにある自然に恵まれた環境にある学校で、教室から見えるオーシャンビューは本当に素晴らしい。目を浴びてキラキラ輝く海を見ると忙しさを忘れ気持ちが和らぎ、仕事を終えて見る夕日に染まる海には

いつも癒されている。本校もまたいつも温かく見守ってくれる地域に支えられており、小規模校ならではのよさを感じている。今年度初めて経験することもあり、日々戸惑い悩みながら過ごすことも多いが、頼りになる先生達がいろいろ教えてくださるので本当に助かっている。

こうして振り返ってみても、これまで教員を続けてこられたのは、母の言葉のとおり、いい出会いを重ねてきたからだと思う。まだまだ自分のことについていっばいで周りの先生達のために自分ができることは限られているが、今の自分にできることを精一杯していきたいと思う。そして、お世話になった先生方に成長した姿を見せられるよう、人として教員として自分を磨き、これからも出会いを大切にして子ども達と一緒に成長していきたいと思う。いつか恩返しができるように。

☎ 796-0307 西宇和郡伊方町

中之浜



# 目指せ！ ヴィヴィッドな人！



宇和島市  
遊子小教諭

片岡真由美

(平八卒)

「ヴィヴィッドな教師になれ。」

この言葉を初めて耳にしたのは、大学時代の保健体育、杉山允宏先生の講義の時だったと思います。杉山先生は、いつも生き生きとされていて受講していた私たちへ、先生からたくさんのパワーをいただいでいました。インパクトが大変強く、「ヴィヴィッド」という言葉は、私の胸に突き刺さり、今では、座右の銘となっています。

「Vivid(ヴィヴィッド)」の意味は、「生き生きとしているさま」「鮮やかなさま」(goo辞書より)とあります。教員になりたての頃は、思うようにいかないことばかりで、作り笑い、泣き笑いの日々でした。しかし、先輩の先生方は、忙しい中にもVividな、生き生きと輝いていらつしやる方がたくさんいました。私もいつかあんな先生になりたいと憧れていました。気が付けば教員生活も二十一年、たくさんの先生方、子どもたち、保護者の方々との出会いがありました。それらの出会いが、今

の自分をつくっているのだとしみじみと感じます。出会った人たちは、みんなそれぞれの色で輝いています。どの色もとても素敵ですが、私にとつて特に輝いて見える色は何なのか、Vivid、どこか漠然と使ってきたこのフレーズを、改めて見直し、「なりた自分」をしつかりとイメージしたいと思っています。

まず思い浮かぶのは、「明るさ・快活さ」です。人を引きつけるような「明るさ」に憧れます。子どもたちの前に立つとき、暗い雰囲気ではなるべく立ちたくありません。苦手な授業も、先生が楽しそうにしていると、なんだか楽しくなってくるはずからです。

「元気があれば何でもできる」と激をとばしていた某プロレスラーも、「気合いだ！気合いだ！気合いだ！」と叫ぶ某レスリング選手の父親も、「君ならできる！」と喝を入れ、只今、〇〇の日めぐりほめまくりカレンダーで人気の某テニスプレイヤーも、めちゃくちゃの明るさで見る人を元気にしてくれます。ぐいぐいとかなり強引に引つ張っていく強い明るさが素敵です。なかなか真似はできませんが、やっぱり前に立って引つ張っていかないといけない時には、テンションを上げて「明るく」いきたいと強く思います。私はネガティブ思考で、心配性でよくよく考え込んだり、落ち込

んだりする性格だと自分では思っています。こんなことを書くくと、私を知っている方は、「真逆だろ」とツッコミを入れてくれそうです。が……。最近では、「前向きだね。」と言われることが多く、自分でも驚きですが、ネガティブな自分が嫌い、そんな自分を変えたくて、できあがっている外面を見て言ってくれているのだと思います。

今でも時々思い出すネガティブエピソードがあります。それは、教員採用試験の合格通知が届いた時のことです。初めこそ歓喜したのですが、その後からじわじわと不安がつつてきました。私のようなコンプレックスの塊が教師なんて本当に務まるのだろうか、勉強はそこそこだし、運動は大の苦手だし、ピアノも弾けないし、おつちよこちよいで失敗ばかりするし……無理だ！なんて私なんか合格してしまっただろうか、無理、無理、絶対に早まった道に進んでいる……。どろどろに落ち込んでしまった私に、友人が目覚める一撃をくれました。

「あなたは甘ったれとる。くよくよ悩む資格はない。あなたが受かったせいで落ちてしまった人がいる。腹をくくってやらんといかん。」  
今でも、時々思い出すその言葉。背中をぐいぐい押してくれる熱い言葉をくれた友人に本当に感謝しています。そうやってスタートした、教員

生活。やっぱり暗いネガティブ思考に、とらわれそうになることが時々ありました。しかし、周りの人たちに支えられ、「明るくVividな人でありたい。」と願い、モチベーションを保ってきたように思います。いつまでたってもやっぱり根暗な私にとつて、「明るい」生き生きとした人は憧れます。

次に、Vividからイメージする自分の理想像をあげるとすると、「思いやり・優しさ」です。

私は、六年生を担任すると「Vivid」を学級通信の名前にし、学級開きや、いろいろな場面担任としての思いを語ります。卒業後の最後の学活でも、必ず伝えるメッセージがあります。それは、「私はしんどいこともあるけれど、Vividな人、生き生きと輝いている人になりたいと思つて頑張っています。みんなも、これから楽しい事ばかりではない、きつとつらくて、しんどいこともあると思います。でも、自分の色で、自分だけの色で輝いていてもらいたい。そして、自分と違う色だからといって、友達を非難するような人には絶対にならないでほしい。色々な色があるからこそ素晴らしいんだよ。みんなのことをずつと応援しています。みんなに負けないように私も頑張ります。」

これは、受け持った子たちへのメッセージであり、自分自身の言

葉でもあります。子どもたちには、「相手の気持ちを考えて行動することが大事だよ。」「差別や偏見は絶対にしてはいけないこと。」と言っている私自身は、本当にそれができているのか。空々しい言葉になっていないだろうか。できていないから、自分を戒めているんだと思います。

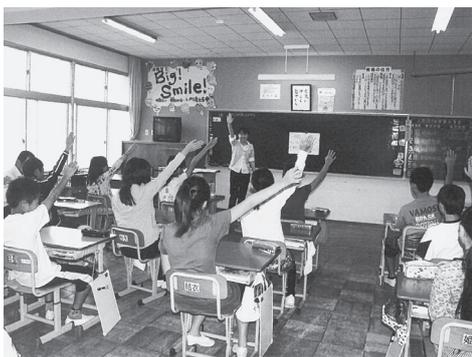
「Vivid」は、まぶしいほどの鮮やかさを表現する言葉ですが、その対極にあるアンニュイな優しさにもつながっているように感じます。私はこれからも、生き生きと明るく輝く人を目指し、同時にだれかを優しく思いやれる人になりたいです。思い続けていれば、必ず変わることができると信じています。

目指せ！Vividな人！

798-0077

宇和島市保田

甲一八一



# 〇〇の先生



今治市

北郷中教諭

山本 浩之

(平二三卒)

今年度、教師生活六年目を迎えているが、この六年間に、「先生は、何の先生？」と何度聞かれたことだろう。「……。(何のって……)」

明確な答えを即答できないまま、もうすぐ六年目も終えようとしている。

初任校は今治市立富田小学校である。一年目は可愛い三年生の学級担任となり、人生初の教え子をもつことができた。二年目と三年目は体育専科として、愛媛県のプロジェクトチームに関わらせて頂いた。体育主任も経験させて頂き、体育科や課外活動に明け暮れる毎日であった。特に夏場は一日プールで過ごすことが当たり前で、色の私も随分と黒光りしていた。小学校で三年を終え、現在勤務している今治市立北郷中学校に赴任した。一年生の担任となり、入学式の為に慌てて礼服を買いに

行ったことが懐かしい。担当授業は技術と数学で、これまでは全く異なる生活がスタートした。

「先生は、技術の先生？」

「先生は、数学の先生？」

「……。(いや、この間までは体育の先生やった。)」

指導経験も未知数の私は、胸を張って、

「そうだ。」

と答えることができなかった。そして、中学校で三年目を迎えた今

もなお、教科指導が十分にできて

いるとは決して言えない。

そもそも、なぜ教師を目指した

のか振り返ってみる。学校が好き

だったからか。憧れの先生がいた

からか。親が教師だったからか。

どれも当てはまるが、一番の決め

手は、『部活動の指導』である。

私は、愛媛大学在学中、ソフトテ

ニス部に所属していた。中学はソ

フトテニス、高校は硬式テニス、

大学はソフトテニスという異様な

経歴をもっている。しかし、私が

大学でソフトテニス部に入部した

理由は、教師となつて、ソフトテ

ニスの指導に携わりたかったから

である。小学校から中学校へ異動

し、念願のソフトテニス部を担当

することになった。ずばり目標

は、『全国大会出場』である。学

生時代には選手として一通りのス

キルは身に付けた。これから常勝

軍団を育てていく準備は整ってい

る。ここから私の指導者としての

ソフトテニス人生は始まった。

「先生はテニスの先生？」

「そうだ。」

間髪いれずに答えた。ソフトテニ

スに関しては、一応、自信があつ

たのである。練習が始まり、生徒

の動きで気になるところはすぐに

アドバイスしていった。しかし、

生徒の動きは私の思うようになら

なかった。

(どうしてなんだろう。)

指導している生徒がなかなか上達

せず、自分でやることと人に教え

ることは全然違うということと思

い知った。また、生徒のやる気を

引き出すことにも頭を抱えた。私

と生徒の目標の違い、私と生徒の

体の感覚の違い、そこをどう結び

つけたらよいかさっぱりわから

なかった。

(本当に自分はテニスの先生

か?)

そんな時(部活動に限らず)に

私を助けてくれたのは、たくさん

の先生方である。体育の先生、技

術の先生、数学の先生、ソフトテ

ニスの先生、生徒指導の先生。学

年主任の先生など、私の周りに

は〇〇の先生がたくさんいらつ

しゃった。見よう見まねでいろ

ろな経験を重ねていくうちに、少

しずつそのノウハウを吸収するこ

とができた。その結果、少しずつ

自信を付けることができた。(実

際にできているかは別として)

私は、周囲の様々な先生に教え

ていたがながらも、子どもの前

に立てば一人の先生である。私が

教えていただいたように、子ども

に分かりやすく学習指導や部活動

指導、さらには生徒指導や進路指

導にも取り組まなければならな

い。

私が目指す(目指さなければな

らない)〇〇の先生は、教科指導

をはじめ、細かく分けるとたく

さんあるのであろうが、教師生活

の中で特に磨いていきたい点は、教

師を目指した原点でもある『テニ

スの先生』である。自分が好き

なテニスであるからこそ、大変な

ことも頑張ることができる。(毎

日小言は言っているが)自分の生

徒の成長を一番近いところで感じ

られることもやはり顧問の魅力で

あろう。中学校へ赴任してから、

とにかく結果を残すことにこだ

わって取り組んできた。勝ち至上

主義では当然いけないが、生徒の

はこだわっていききたい。なぜなら、

勝ったときや苦しい勝負の後の生

徒の清々しい顔は私のエネルギー

源であるからだ。人対人のやり取

りであるため、一筋縄にいかない

ことの方が多いのだが、目の前の

生徒とかげひきをしながら、目標

に向かって確実に前進していき

いと思っている。そして、今日も

明日も明後日も、一日の疲れを吹

き飛ばす勢いで、大好きなテニス

コートへ向かう。

『次なる目標は、県大会優勝』



平成 27 年度 市総体団体優勝

794-0107 今治市玉川町桂 甲一八一(一)

# 「生徒の心に寄り添う 教師」を目指して



松山市  
内宮中教諭  
村上 寿恵  
(平二七卒)

四月、初めての教育現場に戸惑いを隠せないまま、必死に駆け抜けたのがつい先日のように思えます。あっといふ間に一か月が過ぎ、「教師になったんだ」としみじみと実感する間もなく一学期を慌ただしく終えました。実習と現場の違いを心身共に感じながら夏休みになり、少し余裕ができたところで振り返ってみると、一、二年前、実習を前に意気込んだり、夢に見た「教壇」を前に張り切ったりしていた自分と現状の違いに愕然としました。

私立出身の自分にとって、今年経験することは何もかもが新鮮です。授業のねらいや構成、学校行事、生徒指導などの違いに日々追われてしまっていました。たくさん素晴らしい先生方に、いろんな視点での助言をいただいたり、

先生の動きを見たりして、学ぶことは山ほどあります。実習に向けて大学で学んでいた時期を思い返すと、「一か月という短期間で、出会う生徒たちに何を残すことができるか」必死に考え、教材を読み返し、授業づくりがたくさん時間をかけていました。「子どもはどんな反応をするかな」「何を考えるかな」「どんなことを知りたいと思うのだろうか」など、一つ二つの教材について、また、実習中の生活について、あるだけの時間すべてを費やして考えていたと思います。採用が決まっていた数か月も、「子どもの心に寄り添う」にはと、学校生活を様々に想像しながら子どもとの向き合い方に思いを巡らしていました。しかし、教師として教壇に立つ今、子どもの思いを考える時間が減ってしまっているのではと、はっと気づかされました。夏季休業中、ゆとりをもつて考え直してみると、担任としてクラスを持っていない今こそ、授業を通して子どもの思いの変化を考えたり、授業を受け持つ生徒一人一人の声を傾けたりできるのではないかと、気持ちを切り換える契機となりました。

二学期が始まり、体育大会や文化祭、合唱コンクールといった学級の団結が深まるたくさんの行事が波のように押し寄せてきました。自分の仕事と行事の担当でてんやわんやの一方、自分の学級を持つことへの意気込みは高まっていきました。今はまだ、副担任という立場で、それぞれの学級経営の違いを見て学んでいる一年目ですが、大きな行事があった二学期は、各先生の子どもへの熱い思いを感じたり、生徒の成長を感じたりと、私にとっても「充実期」でした。夏休みを機に、「子どもの思いに寄り添うことへの意識を改めに臨んだ新学期でしたが、様々な人の「思い」の複雑さに悩まされました。しかし、それは教師として、人として、将来学級を持つときのため、様々な自分を高める糧となったと感じています。

一つ、耳を傾けていたと思っていた、子どもたちの不安や悩み、喜びも、たくさんの子どもの思いが複雑に絡み合っていて、一人一人に寄り添うだけではなく、時には厳しい態度でその絡まりを解いていかななくてはいけないことを学びました。教師として、思いを真剣に聞き、そして伝え、子どもたちの勇気を出した一歩を促していく先生方の指導に、子どもには見えない思いがあるというひしひしと感じます。そして、小さな言葉や行動でも、感じ変化する「思いの方向」は様々なので、慎重に選ばなくてはいけないということを痛感しました。自分自身の見通しが五里霧中であることが、四月から一貫した一番の反省点ですが、余裕をもつて向き合うことの大切さをもう一度肝に銘じたいです。たくさん先生方から、たびたび救いの手をいただき研究授業の山も越えましたが、時と共に、ちよつとしたことで変化していく思いに敏感になりたいと思います。

大学在学中に学んだことは、毎日の学校生活の中では基本中の基本で、現場は知らないこと、学ばなければならぬことだらけです。井の中の蛙、大海を知らず。大学で学んだ知識をもつと自分のものにしておきたかったと思ひ、今でも時々過去の資料を見直します。学問だけでなく、自分の経験も、二十数年はまだ積みきっていない塵のようなもので、人とし

て、まだまだ足場が固まっていな



〒790-0925  
松山市鷹子町  
七九六一―一八〇四



川柳

来し方行く末



岡本 恭子  
(昭三・愛大)

ままごとが原点だったおもてなし

兄ちゃんのお古に花のアップリケ

ジスイズ・ア・ペン苦労したのに  
役立たず

きっかけがなくて結べぬ赤い糸

ラブレター呑んでポストが酔っぱ  
らう

大虎が最敬礼の朝が来た

崩れても日日積み上げる砂の城

言葉よりスキンシップで包む愛

「どなたさま」母に言われた日の  
ショック

蛍火の命見守る家族の輪

くしゃみした泣いた笑った三代目

採めながら妻の背に貼るサロンパ  
ス

漫步です徘徊なんて失礼な

川上へ旅立つ鮭は帰還せず

憂さ晴らす川柳があり友がいる

☎  
791-8013 松山市山越三丁目

五―三四

水墨画

努力と意欲

西島 節子  
(昭三四卒)

先日、クロスステッチ展を観に行つた。銀行の待合室に十点ほどの額が掲げてある刺繍であった。布全体に細かいクロスステッチで、馬や薔薇、風景の絵が糸で埋められていた。  
作者の杉野チズ子さんは、九十一歳とあった。この九十一歳に驚いた。目や手先、頭脳がしつ

かりしていなければ、微妙な色変化のある糸刺しはできない。そして、その努力と意欲に感動し、励まされた。

水墨画は、筆一本に淡・中濃・

濃の三墨を含ませて描けば、絵の濃淡ができる。努力といえ、何枚も練習する意欲である。なかなか意欲が衰えがちの今日このごろとなった。絵に添える俳句を選ぶ

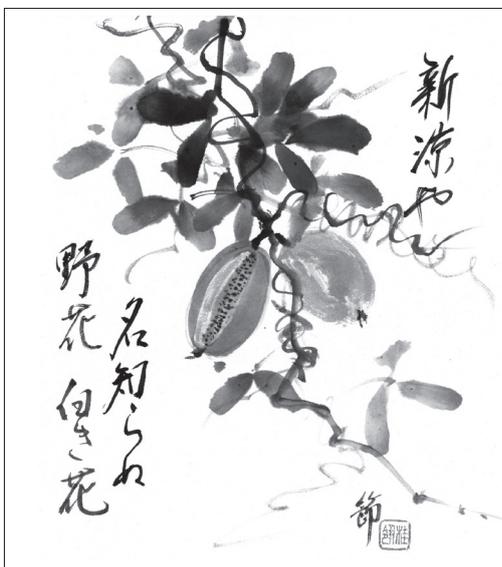
のにも苦勞する。これも楽しみの一つにして、俳句と俳画は続けて生活の張りにしていきたいと思つている。  
(松山市吉藤三丁目二―三二)



大岩に影三つあり秋夕陽



秋空を映して碧き瀬戸の海



新涼や名知らぬ野花白き花

短 歌

濃き影なして

附属特別支援学校教諭

井上真佐子

(昭六二特音卒)

一夏を越えて合はなくなりしシャ  
ツ子らは確かに吾を離れゆく  
不惑不遇不如意不意年々にわが  
身のうちに溜まりゆく語彙  
どこへゆく出口とも知らずパソコ  
ンの画面は暗き部屋に見ひらく  
吸つて吐きまた吸ふといふ単純を  
われは時々忘れてしまふ  
公園にひととき静かに憩ひをるな  
んでもない木、なんでもない人  
肩先に痣ひらくごと心にも見知ら  
ぬ傷の日々に増えゆく

陽のあたる冬の野道をわが歩む草  
の葉よりも濃き影なして

右側に少し傾ぎて歩みをり道にう  
つりてゐるわが影も

遠く鳴るパイプオルガンの音のご  
とき日の照り翳り受けて種蒔く

今日一日生き延びむかな庖丁を温  
めてわれはパン切らむとす

悪人といふはおらねど爾車の狂ひ  
て誰も救はれぬ冬

口角をあげて笑へといふ言葉ほど  
く泣きたき日に思ひ出づ

人と人の間に住まふ苦しさを逃れ  
て今日は梅に会ひにゆく

菜の花が黄の花びらをこぼしをり  
もう誰もぬ教室の隅に

卒業せし生徒らの名札を机よりは  
がしてわれの三月は過ぐ

大学生の頃に出会った短歌を  
細々と続けて三十年になる。歌に  
日付をうっているわけではない  
が、読み返すとその時の感情や風  
景が蘇ってくるから不思議だ。

振り返ってみれば、「嬉しい」  
「楽しい」という歌は少なく、寂  
しや辛さといった負の感情を詠  
んだ歌が大半である。

「負の思いを心励まして作歌す  
るとき、ともかくも価値ある正に  
転じ得るといふものではなからう  
か」とは歌の師・石本隆一の言葉  
であるが、私にとつて短歌とは、  
まさにそういうものなのだと思  
う。

790-0813 松山市菅町

五一〇一八



俳 句

四季を詠む

今井 忍

(昭三三卒)

冬

冬天にクレーンゆるりと船荷積む  
父母在りし日や沸沸の冬至粥  
紙飛行機聖樹の星に不時着す  
石工彫る小さき地蔵や冬ぬくし  
寒行の草鞋にしとど雨が凍む

春  
職退きて真昼の花の散るを見ゆ  
処女作

薄氷を突く靴先拗ねてをり  
行くあてもなくて母校の花の下  
花散らす風止み雨の七七忌  
書き溜めし写経も加へ遍路の荷

夏

謝りに行く子に持たす庭の薔薇  
網棚に預けずメロン膝に抱き  
風入れる履くあてもなき登山靴  
帰省子の声変わりして寡黙なる  
見送りて銀河を仰ぐ橋の上

秋

先客の名刺もありて盆の墓  
コスモスの径ぬけ小さき喫茶店  
霧深き沼に怪魚を見しと言ふ  
豊の秋見届けもせず逝きにけり  
松手入れときどき来ては祖父眺む

792-0042 新居浜市本郷 一一八一一九



退職して十数年、結社「ごろっ  
け」に所属して品川鈴子先生の教  
えを受けました。師系は山口誓子。  
誓子を師と仰がれた先生のお句と  
人柄に魅せられ、もともと文学的  
素養のない者が、多くのよき友を  
得て句会を楽しむことができ本当  
に幸せでした。

掲句はその中から印象深いもの  
を何点か選んでみました。

これからは独学になりますが、  
生涯の友として感性を磨きつつ自  
分らしい作句を続けるつもりで  
す。

# 自 句 自 解



谷井 紀夫  
(昭五〇卒)

学生の頃、学友が俳句部に入っているの聞いて、「へえ、そんな部があるんだ」と思ったぐらい、全く関心がなかった俳句。教職に就き、アラフォーになって興味を持ち始め、句会に属してからもう四半世紀が過ぎた。が、いつこうに上達しない。ここに載せていただくほどのものはないが、この程度のもなら自分にもできそうだと思っただけであればありがたい。

初風呂や三人子一人づつ洗ふ  
子洗いの頃は、妻が夕食の後片付けをする間に三人子を風呂に入れていた。その頃の「吾子俳句」。  
卒業去りし廊下の長さかな  
卒業生が入場の待機をしていた廊下が、式が終わると急に長く感じられる。

## 春ツアーの広告

飛機にして飛ばす

教頭職は春休みも毎日出勤せざるを得ない。旅どころか花見さえもできない。

## 占ひの帰途に寄りたる鍋焼屋

今は笑い話になったが、職に悩み、占い師を訪ねたこともあった。

## 去る人は追はず九月の蟬時雨

人はやがて去っていく。物理的、心理的、打算的な要素で。慣用句と季語を取り合わせた実験的な句。

## 花冷や机跡ある子供部屋

県外へ進学した子供。こうして親離れしていくのに、子離れできない親。

## 鍵穴に鍵挿して消す夜業の灯

灯を消してからでは鍵穴が分からない。全国大会前の多忙な時期の句。

## あま蛭もにが蛭もあて磯しづか

島の学校に赴任。人間界も同じで、いろいろな人がいて平穩が

保たれている。

## 老妻と食ぶる新米ひとめぼれ

実際にはひとめぼれという品種ではなかったのだが、俳句にも演出が必要。

## 定年を報告の墓花吹雪

若い頃は自分には来ないと思っていた定年退職。「大過なく」という言葉が身にしみた。

## 冬雲や千の杖立つ結願寺

御多分にもれず、妻と日曜遍路を始める。いよいよ結願寺。

## 父の日や

### 娘の連れ来たる奴と呑む

こんな日がいつかは来るのだろうとは思っていたが、下戸ゆえに酒は飲んでいないが、これも演出。

いずれも詠み手である自分にはいとおいしい句であるが、読み手の共感を得られるかとなると、まだまだである。とにかく続けたい。

〒799-3102 伊予市宮下一〇七九

# 放送大学 四月入学生募集のお知らせ

放送大学では、平成二十八年四月入学生を募集中です。  
(募集期間)三月二十日(日)

必着

放送大学はテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員とくに現職の方々はつぎに掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。



## 放送大学

知識が人生を変えていく

一科目からでも学べます

平成28年度4月入学生募集中!

(平成28年3月20日まで)

問合せ先 **愛媛学習センター**  
TEL 089-923-854

●インターネットで資料請求・出願できます。 ●資料請求専用フリーダイヤル  
放送大学 [www.ouj.ac.jp](http://www.ouj.ac.jp) ☎ 0120-864-600

○ 放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

○ 放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。

資料を無料で差し上げておきます。お気軽に、**愛媛学習センター**までご請求下さい。



# 先輩を偲ぶ

林傳次先生遺稿集

## 「把翠」を繙く(十二)

### 「巻頭言」集

### 『愛媛教育』誌より

#### 【社会的関心】

教育といふ事業が、社会の向上

発展を助長する為になされるものである以上、現実の社会の動きに無関心であつてはならない筈である。否、現社会の現実に対する正鵠な洞察を基礎として、将来の社会に対する展望を試み、かくして後教育の目標が定められるべきである。然るに事實は多くこれに反して、「明日」の為の教育と口には唱へながら、現実の教育は動もすれば前代の遺物に過ぎない場合が尠くない。その主要な原因として、教育者に社会的関心の欠如せることを挙げては間違ひではあるまい。

社会的関心を持ってといふ事は社会の現実と妥協迎合せよといふ意味でないことは勿論である。望ましいのは社会の動きを洞察して、未だ雨降らざるに漏戸を綱繆して、世の憂に先ちて憂へ、世の楽しみに後れて楽しむ態度である。簡易にいへば、他人の苦しむを見ては

自分の心に疼きを覚える心情である。

最近農村の疲弊が深刻視となると共に、教育者は羨望の的となり、ひいては、教育費の削減が各所に於いては行はれんとする傾向が見える。もとより経済上己むを得ざるの結果か、る削減が行はれるのではあるが、教育者に社会的関心の欠如してゐることが、かゝる傾向を助長した一原因だと思はれる節がないでもない。若し果たして然りとすれば我々は猛省一番大いに考へる所がなくてはならぬ。

(昭和五年八月号)

#### 【好知不好学其蔽也蕩】

学問とは単に知識を習得し、之を蓄積することのみでよいとするならば、現代こそはまさに学問隆盛の世といはなければならぬ。小学校から大学にいたるまで、教師は如何にして多量の知識を伝達せんかに苦心し、生徒は如何にして多量の知識を記憶せんかに焦慮してゐる。世の読書子は変転暫く

もなき新奇の学説を鵜呑みするに之日も足らず、学者はまた目新しい学説を論理整然たる躰系のもとに発表するに醜態してゐる。文運隆盛、まことに慶賀の至りといはなければならぬ。しかし果してこれだけでよいのだらうか。

何の為の学問か。知識才能を啓発錬磨する為か。静かに自己を内省する時、そのみでは満足し得ぬものがある。然らば何の為か。端的にいへば、心の糧を得んが為である。自己の道心を涵養せんが為の糧として学ぶのである。ここに学ぶ者の態度をまづ確立しなければならぬ。

論語陽貨篇の孔子が子路に六言六蔽を説いた中に「好知んで学を好まざれば其の弊や蕩」といふ一句がある。この際静に反省してみる必要があるはしないだらうか。

(昭和五年九月号)

#### 【なくてはならぬ人に】

知人の子が高等学校に優秀な成績で入学したので、御祝いのつもりで独和辞書の扉に「なくてはならぬ人になれ」と書いて送った。そのあとに「あつてはならぬ人となれ」とつけ加へるべきであるが、まだ思慮の足りない青年には誤解される虞があるので、それだけはやめた。それは河井蒼竜の語である。

如何なる事業に携わるにしても

なくてはならぬ人になる。心掛けが必要だ。自分が居なくなつたらあとがどうなるのだ、といふ程の意気がなくてはならぬ。又そうなる様に努めなければならぬ。居ても居なくても、又其の地位を他の人に置きかえられても何の支障もないといふ様では、生まれた甲斐がないといふものだ。あの人が居なくては学校の訓育の中心がなくなる。誰君に去られては図書指導が暗になる。何先生がゐられるので此の村の青年指導が健全に発達したので。さうならなくてはならぬ。さういふ心懸さへあれば、場所の便不便も学校の大小も地位の高下も俸給の厚薄も、それ等何等に介するに足らぬものとなつてしまふ。

仏國の詩人、ゲウルセンは「存在するといふことは他と異なることだ。」といつた。新に教育界に入った多くの若き諸君は先づ何よりも今の学校でなくてはならぬ人になる事を心懸けたまへ。

(昭和六年四月号)

#### 【自ら墓穴を掘る】

小学校長の内申は最も情実に左右され易きものなるが故に、之に依つて入学の拒否を決定せんとするのは極めて危険である。

曩に入学試験改善案の発表せらるゝや、最も多くの人によつて、又最も力強く主張された非難は之であつた。かくて其の結果は、小

学校長の凡てが情実によつて左右せられるものとの觀念を、一般世人に印象させる事になつたのである。これ初等教育に対する一大汚辱でなくてはならぬ。

教育界以外の人々がかゝる非難を加へるのはまだ我慢も出来る。苟も教育者自身が、同様の非難を口にして、毫も怪まざるは、其の心事を了解するに苦しまざるを得ない。徒に世論に付和雷同せるものか、それともかゝる事實の存在を信じて非難するのか。若し後者なりとせば、寧ろかゝる非難の加へらるゝを一大恥辱として、其の根絶に渾身の勇を振ふべきではないか。

#### 祝・受賞

(平成二十七年十一月三日)

#### 祝・叙勲

#### ☆瑞宝双光賞

教育功勞 小池ムツ美 殿  
伊予郡松前町北川原四三九  
(昭和四十一年卒)

教育功勞 池井小夜子 殿  
八幡浜市西近江屋町三丁目  
(昭和四十二年卒)



### 教職の退職を前にして



東温市  
北吉井小学校長  
高須賀秀喜  
(昭五三卒)

愛大同窓会報の寄稿依頼をいただいた。目を通していただける方に、あつかましくほんの少しでも教員として参考になる事柄があればと思ひ、現在の思いを書き記したい。

私は、昭和五十四年、旧温泉郡中島町立怒和小学校に赴任した。僻地二級。当時の児童数は、六十八人だったと思う。校長先生を始め、温かい教職員に囲まれ、指導力のおぼつかない、若さだけがとりの教員であったにもかかわらず、本当に充実した三年間を過ごさせていただいた。何よりも、純朴な児童たち、そして、島の人たちの温かい支えが、私の教員人生の支柱になったと確信している。

三年後、旧重信町立南吉井小学校に勤務することになった。当時

は、千人を超えた大規模校である。任された主任が、図工主任。予想外の主任。三年後研究発表会があるので、研究を進めて欲しいとのことであった。また、本年は県指定の発表会もあると言うことであつた。若さと教職の素晴らしさを実感している自分は、とにかくやろうと思ひ、南吉井小での勤務が始まつた。

南吉井小で七年間勤務したが、ここでは、教職の技術を多方面で学ぶことができた。特に、図工教育、視聴覚教育は、ある程度の自信となつた。また、生徒指導主事や学年主任も経験させていただいた。子どもとの関わりでは、四年間持ち上がりを見せていただいたり、高学年での体育的行事に時間を忘れて取り組ませていただいたりした。さらに、陸上競技の指導技術を身に付ける機会をいただき、半年間の講習の後、資格を取ることができた。その後の陸上の指導で、子どもたちに生かすことができたと思っている。

平成に入ってから、隣の旧川内町の川上小学校に十年間勤務した。ここでは、特に国語・体育の指導技術を高めることができたと思つている。また、学年主任、研

修主任、教務主任と経験していく中で、学校運営について少しずつ自分の責任を自覚するようになってきたと思つている。

平成十一年からは、同じ旧川内町の西谷小学校に勤務した。小規模校である。しかし、学校が取り組み始めたことはすごい。愛媛大学の先生の提案・指導の下、自然体験教室が始まつた。その後、西谷小学校の「緑の少年隊活動」の躍進の土台となつたと思われる。

教諭時代の二十四年間、各学校で任された仕事を、自分では、我が儘を言いながらも自分なりに一生懸命努力したと思つている。しかし、振り返ると、やはり子ども、保護者、そして管理職の先生方を始め同僚たちに支えられてきているのが実際である。

平成十五年からは、初めて旧温泉郡を離れ、広田村立玉谷小学校に勤務した。以降八年間、再度西谷小学校、砥部小学校を教頭として勤務した。多様な校長先生方と接する中で、学校経営の在り方を学ばせていただいた。特に、西谷小学校での教頭としての三年間の勤務は、現在校長職に就いているが、校長としての大切な能力を鍛えていただいた。

こうして、自分自身の教員生活を振り返つたとき、多くの先輩の先生方と同じように、勤めた学校において、与えられた職務をたくさんの方との関わりを通して、学

んでできていることが実感できる。恥ずかしながら、教員を目指して愛媛大学教育学部に入學したわけではない。しかし、大学の四年間、部活に明け暮れながらも、教育実習で教師になりたいと思うようになった。そして、最初の勤務校で、教師の素晴らしさを実感し、その後の勤務校で教職の技量を高めさせていただいた。

現在最後の勤務校が、母校である。私の父母も、祖父も通つた。子どもも通つた。来年度からは、孫も通い始める。今、自分は、自分に求められていることを、今しなくてはいけないことを行つているのか、考えさせられる。ただ、自分自身、「あとから続く人のために」学び続けている。今まで育ててきてくださった全ての人々に對して、恩返し之恩送りとなるよう努力していると思つている。

本原稿が、発刊される頃は、私自身退職目前となつていたのである。これから、ますます多様な社会・時代を生きる人たちに、特に子育てや教職等に携わる方、それぞれの職場・立場で学び続け、キャリアを高めて欲しい。それぞれの立場のプロを目指して欲しい。そして、ぜひ忘れないで欲しい。笑顔の大切さ。側に来てくれる人の何気ない笑顔が最高の薬になるということを。

### 表紙作品について

○作品タイトル

### 「羽ばたく樹」

作者

山 下 智 子  
(平二七卒)

【略歴】

一九九二年八月  
香川県高松市に生まれる

二〇〇八年四月  
高松工業高等学校入学

二〇一一年三月 同校卒業

四月

愛媛大学教育学部芸術文化課程造  
形芸術コース入学

二〇一五年三月 同校卒業

二〇一五年四月  
富地電機株式会社入社

【作品サイズ】 150cm×150cm×  
150cm (W×D×H)

【作品の概説】

この作品は、二〇一五年二月に愛媛大学教育学部卒業制作展で展示したものです。

私は昔から自然が好きで、特に巨木の力が及ばない圧倒されるような、自然の力に魅力を感じてきました。それは私個人の話ではなく、巨木を神木として讃え、自然と共に生きてきた日本人古来からの感覚ではないかと思ひます。そんな巨木の穏やかさや優しさ、強さや畏怖の共存する不思議な魅力を表現したくて「生命の迫力や力強さ」をテーマに制作しました。

ヒクイドリをモチーフにしたのは、動物園でみた悠々とした姿に、巨木に感じる迫力や力強さと同じような気持ちを感じたからです。「羽ばたく樹」というタイトルの通り、根が足で、葉が羽で、幹が体と首で、鳥のように見える樹というイメージです。

作品テーマの「生命の迫力や力強さ」を大切にしながら、制作者も鑑賞者も楽しめる作品になったと感じています。

### 昭和二十七年 入学の頃の思い出



小野植元幸  
(昭二九卒)

高校三年から書きはじめて、日記今年で六十四年。昭和二十七年は、二年目の日記より。

#### 四月二十一日(月) 入学式

「今日は、非常によい天気。いよいよ楽しみにした入学式。午前七時起床。下宿(北京町)先から近い、現松山東高に隣接する「文理学部」での入学式。九時半着。「文理学部」「教育学部」合同のため、七百余名一人ひとりの入学は、希望に燃え輝いていた。辻田力学長の式辞。教職員紹介。午後は教育学部に移動し、ガイダンスあり。

#### 四月二十二日(火) 晴れ

午前八時半登校。ガイダンス午前十一時までであった。午後は、自治会。各文化部の活動と部長紹介。その後、喜多郡の先輩学生より学生生活のあり方の説明指導を受け



喜多郡出身者一同 (昭和27年3月22日)

敗戦の日本を再生する手はじめのため、昭和二十年に始まった国民体育大会が、在学中の昭和二十八年、第八

た。

その頃農学部は「松山農大」。工学部は、新居浜工専とも呼んで新居浜にあった。山西町に松山大(外国語)があった。

昭和二十八年三月二十二日。教育学部校門前で喜多郡(大洲市)出身の学生、五十余名、五十崎町平岡出身村上節太郎先生、補助の先生の集合写真を撮る。現在、八十二歳以上の人がばかりで、三分の一ぐらいが他界。当時



松山駅 (昭和30年11月)  
内子~松山間2時間半

は、学制改革にて、男師範、女師範が新制大学に編入。戦後ベビーブームで、児童生徒が急増。教員不足のため、高校卒を代用教員に採用した。教員不足のため、大量

回、四県共同開催の国民体育大会があった。開会式は、競輪場をかねて現城山公園(松山二十二連隊跡)で、天皇皇后両陛下臨席。陸上競技は徳島県、ソフトボール(女子)松山東高であり高松宮妃殿下臨席であった。大会の役員で、学生が補助役員として五日間、電話で各県からの競技記録し天皇杯八位入賞。

大会腕章・胸章・記録簿・バツジ・タオルを、県生涯学習センターへ寄贈。国体開催で公共施設、ラグビー場、テニス、野球場、体育館等堀之内に整備し、大会後、県内のスポーツ向上に貢献。二年後の愛媛国体を楽しむにしている。できれば元気で世紀の祭典、東京オリンピックを終わらせる期待と、よくばる心で健康に留意した生活を日々をおくりたいと願っている。

「書くことは、歴史を残すことである。」と思い、「書くこと」「読むこと」に努め、脳の活性化。「ええことを言っても、書かんと残らん。」の信念でいる。

### 原稿募集

次号 第二二二号  
短くても結構です。多くの方々のお気軽なご寄稿をお待ちしております。

「会員の声」・「今、教育に思うこと」について、ふるってご投稿下さい。

同期会や支部同窓会などの集いや活動について

恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について

職場の近況や所感や活動について

文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩・絵手紙等)について

会員便り  
1 旅行記 4 この頃思うこと  
2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など  
3 教育雑感

※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会で選ばせていただきますので、ご了承下さい。

原稿メット 四月三十日  
発行 七月一日 予定

字数  
依頼者以外は千二百字厳守  
四〇〇字詰原稿用紙の一行を十五字にして書いて下さい。

写真  
筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。

喜多郡内子町  
五百木一五四

# 勝中生徒会を中心に全校体制で取り組む 「ロシア兵墓地清掃奉仕活動」に参加して



菅田 顕  
(昭三四卒)

二学期に入って直ぐの日の放課後、私は勝山中学校校長さんにお話があって、校長室を訪れた。

話も一段落付き、最近の勝中学生のことで話が弾んだ。私が「今の勝中生の登下校の様子は実に落ちていて、何か『好きです勝中』を自然体で表現している観がありますね。」と話すと、校長さんが「そうですね。これも先輩の背中を見て育って来ているからでしょうね。」と。また、「そのことが具体的に見えるのが、生徒会の活動ですね。今も、生徒会が中心になって主体的に取り組んでいる『ロシア兵墓地清掃奉仕活動』ですね。月の第二土曜日に奉仕活動をしていて、活動は三十年以上続いている歴史と伝統をもつ活動です。それに毎回、百人以上の生徒が自主的に参加をしているのですよ。私も参加していて生徒の素晴らしさにいつも感動し、感謝しています。」と。

それをうかがい、私も教師だった性が、「よろしかったら、私も参加させてもらえませんか。」とお願いした。校長先生から「九月の奉仕活動日は、体育大会の関係で五日の土曜日、九時集合で一時間の奉仕活動をします。宜しかったら是非参加してみてくださいませ。」と快諾をして頂き、心弾ませながら校長室を辞した。

九月五日(土)は早朝から、久しぶりの好天に恵まれた。私はいそいそと集合二十分前に、御幸一丁目の来迎寺境内にあるロシア兵墓地へ行った。早くもそこには生徒会役員をはじめ約三十名程の自主参加生徒が集まっていて、突然現れたこの見知らぬ年寄りに、全員がニコニコしながら「おはようございます！」と明るい元気な声が境内に響き渡った。「今日、私も清掃活動に参加させて頂きます、清水町に住んでいます菅田と申します。初めての参加ですので皆さんに色々教えて頂きたいと願っています。よろしくお願いします。」と挨拶をした。

活動開始九時、話は聞いていたが、私は精々よく集まって五十名前後だろうと予想していたが、実に百名を優に超す生徒が集まっている勝中生に接し頼もしく感じた。(当日は百二十九名の参加生徒数、教員五名)

墓地は、日露戦争(一九〇四年(明治三十七年))時に松山の

地にロシア兵の捕虜収容所がおかれていて、病気や負傷で祖国へ帰国することが叶わず松山の地で亡くなったボイスマン大佐をはじめ九十八基の墓石が整然と祀られている。

「静かにして下さい。」「服装を正して下さい。」と生徒会役員の司会の声で活動が始まった。始めの言葉として、生徒会長から、自主参加への感謝の言葉、作業心得についての話があり、続いて生徒会執行部から、作業手順を書いたカードが各学年に配布され、それに基づいて作業をしてほしいと、テキパキとした指示があり、参加



生徒全員は実に手慣れた様子で作業に取りかかっていた。

作業内容は、先ず、それぞれの墓石の周辺を、ある時は竹べらを使って雑草を抜き、周りの落ち葉を全て拾い、次に墓石に水を掛け、用意してきた雑巾やスポンジで丁寧に墓石を磨いていた。その際、「仏様に失礼に当たるので、くれ

ぐれも墓石の頂上には決して手置かないように」との、配慮のある細かい指示もあった。

生徒全員、それぞれ自主的に作業分担をして、黙々と熱心に作業に打ち込んでいた。私は、久しぶりに、このような子ども達の作業姿に接し清々しい気持ちになってきた。これこそ三十年を超える伝統行事が子ども達を見事に育てているのだなあと感じた。

周辺の土手の雑草を取り除き、設置されているトイレの清掃もされ、作業終了に近くなるのを見計らって、各墓石の世話係の代表者は、生徒会執行部が用意している、火の付いた練香を取りに行き、それぞれのお墓の前に供えていた。そして、生徒会から声が掛かった。「皆さん立ってください。」

「それではロシア兵の方々に黙祷を捧げます。」「黙祷」参加者全員静かに黙祷を捧げた。

「黙祷終わります。」「終わりの言葉を副会長さん御願います。」

「今回も積極的に参加してください。さりありがとうございます。」

いました。お陰様で墓地が一段と綺麗になりました。次回の参加も宜しく願います。」以上でロシア兵墓地清掃奉仕活動を終わります。

墓地は生徒達の心のこもった作業で一段と綺麗に、墓石は北の方故国に向き、優しく世話をして下



さった生徒達に感謝をするかのようには凛とした佇まいをしていた。

帰途の道々参加した生徒達に「奉仕活動について」尋ねた。生徒達は「清掃後の気持ちがいいので」「先輩と一緒に作業することが楽しくなっているので」と、嬉々として語ってくれた。

このことは、勝中生が先輩から営々として受け継いできた伝統文化が後輩を確かに生み育てて来ているからだろう。

伊予人のお接待文化もてなしの心をもった生徒達は、この草の根の活動を通し、自然体で「戦争のない世界平和、人皆平等、人権・博愛」の先輩からの心の伝統文化の糸を紡ぎ、今は力強い絆となつて来て

いるからだと強く感じた。



# 支部だより

## 落語二連発 in 松前



松前町松前小教諭  
小笠原 義  
(昭五六卒)



松前町  
渡辺 正治  
(昭四八卒)

松前町教友会は「教育の町」松前町の教育の振興を図り、OBと幼小中高の現職教職員の親睦を深める目的で設立されました。今年で四十五回目を迎え、総会と講演会が、八月五日に北公民館で盛大に行われました。

今年は和やかな雰囲気での講演会にしようという思いから、村上朋子会長と親交のある愛大教育学部出身の古今亭菊志ん師匠を東京からお招きし、『落語で笑って、ストレス発散』と題して、ユーモアたっぷりに講演をしていただきました。地域のことや地元教育界のことを巧みに盛り込んだり、会場のOBの先生の一声一声にも絶妙

な語りで切り返されたりして会場は笑いが渦巻き、真夏の暑さを吹き飛ばす一時でした。会員の感想を紹介します。

○声、動き、表情、扇子だけなのに世界が広がる広がる。

○想像力をかき立ててくれる伝統芸能の凄さに感動した。

○凛とした空気の中で単純に笑いや、心が軽くなった。

○話す間や声色、抑揚等、道を極めた方の素晴らしい技を見せていただいた。

続いて行われた懇親会では菊志ん師匠を囲んで話の輪が広がり、町行政関係者、経済界の方々、OB並びに現職教職員の親睦が図られました。そして参加者の皆さんどの方も満足された顔で会場を後にしていきました。

\* \* \* \* \*

夏休みの八月九日、松前総合文化センターに桂三幸さん(松前町出身・愛大卒)、柳家花ん謝さん(八幡浜市出身・愛大卒)、月亭方正さん(本名・山崎邦正)をお迎えし、『はばたけ伊予っ子！子ども寄席 in 松前』が開催されまし

た。当日は開場の一時間も前から列ができ始め、会場は五百名以上の観客で盛り上がりました。

『はばたけ伊予っ子！』は教育学部同窓会の主催で、伊予地区での開催は平成二十年に続いて二度目です。今回は、国語の教科書(小四・教育出版)に三遊亭円窓さんの「ぞろぞろ」が紹介されており、子どもたちに本物の落語を、という強い思いから計画しました。

前半は三幸さんと花ん謝さんによる落語教室。お二人の楽しい噺と掛け合いに、会場全体が落語の面白さに引き込まれていきました。そして、落語では定番の扇子を箸に見立てて「そばとうどん」を食べる仕草です。麵の太さが違うのだから違って当然と、微妙な違いの説明を聞きながら仕草を見ていると、そばはそばらしく、うどんはうどんらしく見えるから不思議です。その後会場の子どもに「やってみたい人」と尋ねると、勇氣ある小学校低学年と思いき男の子が手を挙げて壇上に上が

り「まず、そばを食べてもらいましょう」の声に挑戦が始まりました。大勢の観客に怖じることなく、花ん謝さんの助言を聞きながら数回繰り返すうちに、何となくそばを食べているように聞こえてきます。「では、うどんを食べてもら

いましょう」には、中学生の女の子が挑戦しました。さすが中学生。呑み込みが早く、二回か三回の挑戦で花ん謝さんから合格点を、そして会場からは大きな拍手を貰いました。

後半は三人の噺家による落語です。まずは柳家花ん謝さんによるお馴染みの寿限無。軽快な口上で「寿限無寿限無、五劫のすり切れ、……やぶら小路ぶら小路、パイポパイポ、パイポのシューリンガン、……」を繰り返す落語です。多くの人は何度も聞いたことがあると思いますが、本物を前にするとその迫力に圧倒される思いでした。

続いて桂三幸さん。子どもに昔話を聞かせて寝つかせようとします。「昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました」と話し始めると、「昔々っていつ頃なの？」としておじいさんとおばあさんなの？と次々に質問します。親がその返答に窮している子どもが的確な答えを示すので、ぐうの音も出ません。うなだれる親と勝ち誇った子どもが目の前にいるようでした。

最後は月亭方正さん。とある宿で、旅人に「手水を回して」と言われるところから話は始まります。手水を知らない宿の住人は一杯考えて対応するのですが、ピ

ント外ればかり。旅人は怒ってしまいませ。これではいけないと宿の二人が旅人になり、手水を前にどうしたものかと考え、それを飲み干してしまおうという落語です。高座で熱演する方正さんは、噺家を目指して七年目。噺家としての新しい道を究めようとする真剣さに、男の魅力さえ感じました。

方正さんが三幸さんの友人であったことも幸いしたのですが、ポスターの作成、県内各市町及び近隣各学校への案内、出演者との連絡や調整など、松前総合文化センター(株)ケイミックス)の全面的な協力により本公演が実現したことに感謝申し上げます。



2015.08.05

## 教育学部の市川克明准教授が率いる 木管5重奏アンサンブル「旅縁」が演奏会を開催しました

学部  
トピックス

教育学部音楽教育講座の市川克明准教授が率いる木管5重奏アンサンブル「旅縁」Tabinoenが、同講座の福富彩子准教授と一緒に、木管5重奏とピアノのアンサンブル作品の室内楽演奏会を行いました。

アンサンブル「旅縁」Tabinoenは、2011年の東日本大震災後、東北被災地支援演奏旅行を機に結成された木管5重奏アンサンブルです。メンバーは、市川准教授（ホルン）、高橋真理氏（フルート）、宮川敦史氏（オーボエ）、古川邦彦（クラリネット）、小山佳子（ファゴット）の5人です。それぞれがプロとしてコンサートで演奏したり、個人レッスン、吹奏楽の指導などを行っています。これまでに東北を中心に多くのチャリティーコンサートを開催しています。今回は、福富准教授を迎え、木管5重奏とピアノのアンサンブルの室内楽演奏会を行いました。

7月25日（土）は、西予市立野村中学校、内子町立大瀬中学校の2校で学校訪問ミニコンサートを行いました。生徒にとってはなかなか聴く機会がない楽器の紹介やトークを交え、美しい響きで多くの生徒と地域の方々を魅了しました。

7月27日（月）は、松山市（いよてつ高島屋9Fローズホール）で室内楽演奏会を行いました。木管5重奏は中学高等学校などでも比較的良好演奏される編成ですが、そのレパートリーはかなり限られており、ピアノを含んだ6重奏はあまり演奏される機会がありません。演奏会では、モーツァルト、バッハ、ベートーヴェンの名曲からフランスのイベールが放つ色彩感あふれる作品、現在ヨーロッパで流行っているブルーマー作品などが演奏され、観客にとって木管アンサンブルを聴く貴重な機会となりました。

市川准教授は、大震災後の東北地方での被災地支援演奏旅行がきっかけで活動を始め、その体験で「音楽をする喜び」、「明日への希望」をもらったそうです。そして、次世代を担う音楽好きな児童生徒の皆さんを対象に、このような音楽を生で聴く機会の少ない地方での演奏活動を積極的に行っていきたいとのことです。



野村中学校でアルペンホルンを演奏する市川准教授



演奏会風景

## 《科学イノベーション挑戦講座》受講生が 光合成を司る葉緑素の単離と銅クロロフィルの調製に挑戦しました

平成27年11月27日（金）、科学イノベーション挑戦講座を受講している中学生が、光合成を司る葉緑素の単離と銅クロロフィルの調製に挑戦しました。

科学イノベーション挑戦講座は、国立研究開発法人科学技術振興機構の次世代科学者育成プログラムメニュー B採択事業として、3年目の実施になります。

今回は、植物が太陽光を吸収して成長するために必要な光合成を司る葉緑素のなぞに挑戦しました。植物の成長に光が関わっていることは学校教育を通して何度も学習しますが、植物の光合成は生物領域として学習するため、光を捕集する機能を持つ分子、葉緑素の構造については学習しません。一方で、葉緑素を含むポルフィリン構造は、大学では光化学の重要な分子として、たとえば光増感剤として太陽光電池の機能を増幅させるために、現在も活発な研究がなされています。そこで、本講座では学校教育の真空地帯である葉緑素の構造のなぞに挑戦しました。

自然界にある物質は、ほとんどの場合混合物で、私たちはさまざまなものが混ざった物質を見ています。そのため、葉緑素の構造を調べるためには、まず混合物から葉緑素を分離しなければなりません。本講座では、カラムクロマトグラフィーという手法を使って、クロレラ（緑藻類）とスピルリナ（藍藻類）の緑色の色素を、黄色と青緑色、その他の物質に分離しました。カラムクロマトグラフィーとは、ガラス管の中に特殊なシリカゲルを詰めて、溶媒を流して混合物を分離する方法です。混合物は、シリカゲルへのくっつきやすさと溶媒への溶けやすさによって、純物質に分離します。私たちの目には緑色に見える物質も、カラムクロマトグラフィーによって分離すると、黄色、青緑色、緑色などさまざまな色の物質が混ざっていることが分かります。そして、紫外可視吸収スペクトルと分子が吸収する光と色の関係から、黄色の分子を緑黄色野菜に豊富に含まれる $\beta$ -カロテン、青緑色を葉緑素と同定しました。

次に、葉緑素に塩酸を加えて、葉緑素からマグネシウムを取り去ります。この化合物はフェオフィチンとよばれ、緑色～褐色の不思議な色をしています。そこに、今度は塩化銅水溶液、もしくは塩化亜鉛水溶液を滴下すると、塩化銅を入れたものは青緑色（銅クロロフィル）、塩化亜鉛を入れたものは黄色（亜鉛クロロフィル）に変化します。銅クロロフィルは着色料としても使われる安定な化合物であり、亜鉛クロロフィルは紅色光合成細菌で光合成に使われています。このように、葉緑素は試薬で処理することで多彩な色を見せますが、その分子構造は変わっていません。

そこで、生徒は紫外可視吸収スペクトルを比較することで、葉緑素の構造が変わっていないこと、光を吸収する二つのピークが変化することで色が変化していることを明らかにしました。

私たちは、物質の構造の変化を色の変化として捉えることができます。つまり、分子は小さいですが、決して見ることができないわけではないのです。しかし、色の変化が何を意味しているのかは、色だけではわかりません。そこで、分析化学が必要になるのです。人間の五感は鋭敏ですが、その能力を過信せず、わかることとわからないことを整理し、私たちが何を知り、何を知らないのかを考えられるようになったとき、中学生は科学者として大きく羽ばたくでしょう。



カラムクロマトグラフィーで葉緑素を単離します



紫外可視吸光度計で測定しよう

# 愛媛大学ミュージアムへの誘い

ミュージアムというメディアを用いた愛媛大学の学術研究成果の公開・発信

驚きや発見をもたらす空間は新しい出会いや感動を生み出す

触れる 感じる 発見する 開かれた体感型ミュージアム

知的刺激に満ちた学びの楽しさがここにある。

The Gallery will stimulate your sense of wonder.

愛媛大学の学術研究活動に本格的な興味・関心をもっていただくための、楽しくおもしろく学べる大学博物館です。



入館料	無 料
開館時間	午前10時～午後4時30分 (入館は午後4時まで)
休館日	(1)火曜日 (2)その他 ・年末年始(12月28日～1月4日) ・大学入試 センター試験日、前期・後期日程試験日 ・メンテナンス休館(2月1日～15日) ・臨時休館
その他施設等	ミュージアムカフェ コーヒーや、手作りのホットドッグ・カレーライスなど、軽いお食事が可能です。 ランチタイムは、ミュージアムカフェの他、大学生協食堂(日曜など休業を除く)なども利用できます。



## LOGOMARK CONCEPT

学術研究の営みと成果の公開・発信をシンボリックに表現。ミュージアムの「ミ」をモチーフとした3本のゆるやかな曲線は、人文・社会及び自然分野の学術研究活動を表す。真ん中のウエーブは、「Museum」の「M」をモチーフとし、学術研究成果の発信と普及を表す。



## 常設展示案内

- 進化する宇宙と地球
- 愛媛の歴史と文化
- 生命の多様性
- 人間の営み
- エントランス
- その他施設案内

## 第2ゾーン 愛媛の歴史と文化 (Culture, Ehime History)

愛媛の地のゆたかな歴史的遺産を次世代に語り継ぐ。  
郷土の優れた歴史・文化遺産や輝かしい先人の英知を活かし、地域文化の創造・発展に寄与するため、最新の人文系研究成果を公開しています。愛媛大学が所蔵する無名の書聖・三輪田米山の日記や、世界遺産登録を目指す四国遍路に関する資料などを用いた研究から、近世・近代における新しい愛媛の姿を発見することができます。



## エントランスホール

- ・愛媛大学総合情報コーナー
- ・トピック展示
- ・受付  
受付にて学生スタッフによるガイドツアーを承っております。お一人様からお気軽にお申し込みください。



## 愛媛大学の歴史 (History of Ehime University)

60年を超える歴史と伝統を踏まえ「地域にあって輝く大学」を

愛媛大学は、1949(昭和24)年に新制国立大学として、松山高等学校、愛媛師範学校、愛媛青年師範学校、新居浜工業専門学校を母体に、文理学部、教育学部、工学部の3学部で発足しました。その後農学部、医学部が加わり、6学部と大学院7研究科からなる学生数約1万人を擁する四国最大の総合大学として発展してきました。

2004(平成16)年、愛媛大学は国立大学法人として新たに出発し、「地域にあって輝く大学」「学生中心の大学」(愛媛大学憲章)の実現を目指し、教育・研究・社会貢献において様々な取り組みを行っています。



会報の送料納付  
について

平成二十七年七月号でもお知らせしましたように、会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇一七二七五四  
送り先 七九〇一八五七七  
松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

会報送料・寄付者名

平成27・6・12月

宮内正義  
三浦靖弘  
白石正郎  
福田美砂子  
清家博  
佐伯やよい  
村上トモ子  
武藤萬理子  
横関紀美子  
野首和子

敬弔 (物故会員)

(死亡年月日) (氏名)

27・1・12 二神 一  
(昭11・本科二)  
27・3・8 岡田 光三郎  
(昭19・本科)  
27・5・10 岡本 誉富  
(昭6・本科二)  
27・5・14 長野 野實  
(昭15・本科二)  
27・5・20 正月 重利  
(昭23・本科)  
27・5・30 平田 美代子  
(昭21・青師)

27・5・30	27・5・20	27・5・14	27・5・10	27・3・8	27・1・12	(死亡年月日)	(氏名)	27・7・13	27・7・12	27・7・6	27・7・2	27・7・1	27・6・25	27・6・16	27・6・12	27・6・12	27・6・5	
平田 美代子 (昭21・青師)	正月 重利 (昭23・本科)	長野 野實 (昭15・本科二)	岡本 誉富 (昭6・本科二)	岡田 光三郎 (昭19・本科)	二神 一 (昭11・本科二)			森岡 敏 (昭23・本科)	山形 侃 (昭30・愛大)	須山 明 (昭20・本科)	熊野 史郎 (昭35・愛大)	門屋 典子 (昭29・愛大)	小野 雄三 (昭14・本科二)	片野 公宏 (昭25・青師)	芳我 一章 (昭22・本科)	武智 忠雄 (昭22・本科)	加賀山 謙吉 (昭32・愛大)	越智 照子 (昭25・本科)
27・11・9	27・10・31	27・10・18	27・10・17	27・10・17	27・10・15	27・10・11	27・9・30	27・9・20	27・9・19	27・8・30	27・8・28	27・8・26	27・8・23	27・8・21	27・8・21	27・8・21	27・8・21	27・8・20
菊池 利雄 (昭26・愛大)	片山 卓 (昭23・本科)	浅田 豊 (昭26・愛大)	石丸 侑男 (昭29・愛大)	門田 勝哉 (昭13・本科二)	成宮 唯志 (昭23・本科)	加藤 哲道 (昭17・本科二)	猪上 達勇 (昭32・愛大)	高須賀 都 (昭6・本科二)	畑野 久 (昭20・本科)	清原 忠 (昭25・青師)	村上 喜武 (昭14・本科二)	阿部 博文 (昭32・愛大)	中田 英夫 (昭29・愛大)	桐木 五郎 (昭20・本科)	大戸 文 (昭36・愛大)	田口 明 (昭30・愛大)	高橋 敏明 (昭24・青師)	
28・1・2	27・12・28	27・12・19	27・12・18	27・12・15	27・12・8	27・12・4	27・12・2	27・12・1	27・11・30	27・11・27	27・11・24	27・11・22	27・11・19	27・11・16	27・11・15	27・11・10	27・11・9	
松田 建雄 (昭28・愛大)	上杉 テル子 (昭18・本科二)	上田 武文 (昭22・本科)	高井 吉雄 (昭17・本科二)	山本 弥栄 (昭19・本科二)	平田 キクミ (昭24・本科)	岡野 勝敏 (昭18・本科二)	上甲 昇 (昭17・本科二)	越智 辰夫 (昭18・本科二)	渡邊 以都甫 (昭32・愛大)	渡邊 辰夫 (昭20・本科)	正岡 三郎 (昭24・愛大)	井上 孝行 (昭27・愛大)	渡部 健一郎 (昭24・本科)	水本 勝好 (昭29・愛大)	高橋 久二男 (昭22・本科)	小西 幸子 (昭54・愛大)	中井 貞二 (昭31・愛大)	

# 「第6回愛媛大学ホームカミングデイ」を開催しました 【平成27年11月14日】

平成27年11月14日（土）に、第6回愛媛大学ホームカミングデイを開催し、卒業生や教職員OBの300人を超える会員が参加しました。

**【プログラム】**

- ◆13：00～ 同時開催イベント
  - ミュージアム見学
  - 植物工場見学
- ◆15：00～ 式典（南加記念ホール）
 

司会：合田みゆき氏（フリーアナウンサー 教育学部卒）

  - 学歌斉唱……愛媛大学合唱団
  - 学長挨拶……大橋裕一学長
  - 特別講演『四国遍路を楽しむーチャレンジ1,400kmー』  
寺内 浩教授（愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター長）
  - 卒業生挨拶……越智陽一氏  
（株式会社ジョイ・アート代表取締役社長 工学部卒）
  - 学生サークル紹介……チアリーディング部、合唱団
- ◆17：00～ 懇親会（大学会館1階）



「みきゃん」と受付の様子



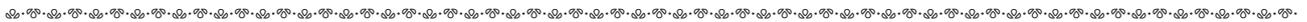
大橋裕一学長の講話



寺内浩教授の講演



越智陽一氏の卒業生挨拶



ホームカミングデイは、卒業生の皆様に青春時代を過ごした愛媛松山に、授業や研究、サークル活動に励んだ懐かしいキャンパスに帰ってもらい、恩師との交流、後輩との交流、教職員、在校生との楽しい時間を過ごしていただくため、平成22年度から愛媛大学と校友会との共催で実施しており、今回が6回目の開催となりました。

当日は、愛媛県のマスコットキャラクターの「みきゃん」も駆けつけるなか、正門からグリーンプロムナード、グリーンプラザなどがリニューアルされたキャンパスに300人余りの卒業生や教職員OBの皆様が母校に足を運んでいただき、キャンパス内の学生祭と相まって活気あふれる一日となりました。

また、式典に先立ち実施した同時開催イベントでは、「ミュージアム見学」、「植物工場見学」が実施され、多くの方々に参加いただきました。

南加記念ホールで行われた式典では超満員となり、パイプ椅子で補助席を作るほどの盛況ぶりでした。

式典では、愛媛大学合唱団の学歌斉唱に続き、大橋裕一学長より挨拶と愛媛大学の最近の動きについて講話がありました。

続いて本学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター長の寺内浩教授の『四国遍路を楽しむーチャレンジ1,400kmー』と題した特別講演がありました。講演では日本遺産に認定された四国遍路が世界遺産登録に向けての取り組みや四国遍路の国際化、また、愛媛大学との関わりなどについて分かりやすく解説していただきました。



超満員となった会場



学歌斉唱（愛媛大学合唱団）



サークル紹介の様子（チアリーディング）